

將棋虎之卷

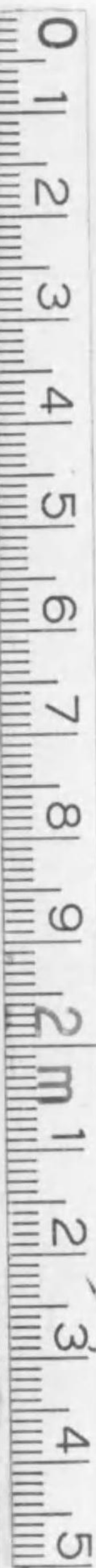
特257

33

21

243

始



特 257
243

名人小野五平先生校閱
將棋新報社編輯部編

將棋虎之卷

東京 大阪屋號發行



は し が き

むかしは寺子屋で小供に教ゆるに初めから四書五經の如き六ヶ敷書物を以てしたものであります。之がために無用の腦を費して有用の學問が出来ません。今日の小學校では兒童の腦力に應じて平易ものより順次に教へて行きますから能く有用の學者となる人が多くあります。將棋も其通りで昔の將棋書類は定跡と指將棋ばかりで先づ初段近くの力のある人でなくては會得することが出来ません。今將棋の書類は餘り廣く行はれませんが本社が初めて工夫して定跡には講義を加へ指將棋には講話を加へて種々の書類を出板したので初心の人にも會得することが出来るやうになりました。然るに書肆萬歳館から更らに一層初心の人にも分るやうに極々「いろは」からの書物を編纂してもらひたいとの希望がありましたので今回此書を編輯しました。此書は既に指せる人には幼稚すぎるとの笑ひもありませうが初めて駒を手にする人は師匠を頼まずして其道に入ることに出来るやうに書いてありますから初心者には多少の利益があらうと思ひます。詳しくは書中にありますから能く讀み能く研究していただきたいものであります。

大正二年の夏

編者記

目録

初めに讀むべきこと
 將棋の駒き、道と並べかた
 盤面圖
 駒が化ると云ふ事と駒を取ること
 種々の規定
 將棋の術語
 將棋の戦狀
 將棋の用語
 駒の働き主要
 實例各種
 歩の利用(歩をつかふの實例)
 はめでの實例
 必死の實例
 將棋の指し方

總説
 將棋の名稱
 平手の駒組
 相懸り
 櫓圍(又相ひ櫓)
 袖飛車
 石田指し方(先手方石田)
 美濃圍
 四間飛車(先手は居飛車)
 中飛車
 向飛車
 雁木(引角)
 三筋
 香車落
 左香落 本定跡
 角落

角落銀象嵌
 角落櫓圍
 飛車落
 飛香落
 二枚落(飛車、角落)
 三枚落
 四枚落
 五枚落
 六枚落(金銀)
 附屬
 稽古盤
 目錄

將棋虎之卷

將棋新報社編輯部編述

初めに讀むべきこと

昔から將棋は入り易くして學び難く碁は入り難くして學び易いと申されませんが實際名人上手とまでなるには何れとても學び易い理由はなく結局同じやうのものでありませうが唯最初將棋の方が手がつけやすいものと見えまして將棋の方は誰でも小兒の中から駒の行き道ぐらゐは覺えますが碁の方は壯年になつてから覺える人が多く見え

るやうであります然るに碁の方には却つて素人で相應に打つ人が澤山出來ますが將棋の方は小兒の時から弄ぶ人の多きに拘はらず大抵

行き止つて段位以上となる人が少ないやうであります之に依つて見ますと幾分か將棋は入り易くて學び難く碁は入り難くして學び易いと云ふ點があるかも知れませんが併し之は前にも云ふ通り名人上手のことではなくて素人連の話でありまして縦令名人上手とまでは行かずとも高段と云はるゝまでになるのは將棋も碁も同様でありますして何らが六ヶ敷何らがやさしいと云ふことはなく何れも六ヶ敷ものであつて容易に高段に至ることの出来ないものと見えまして將棋も碁も高段の人は甚だ少ないのであります然れば何ゆる斯る結果が生ずるかと思はれます碁の方は我々の専門外でありますから説明は出来ませんが將棋の方は能く説明が出来ます因て其説明をいたして將棋を學ぶ人のためにいたさうと思ひます

扱將棋を學ぶ人を見ますに入り易いからと云つて駒の行き道さへ覺

ゆれば素人同士にて無筋無法に指し合つて所謂下手なりに固まつてしまひそれからと云ふものはそれ〴〵に我流が出て本筋を見ても心に止めず又本筋を稽古しやうと云ふ心もなく唯々指してさへ居ればそれでよしとして居るのでありますから終に行き止つてしまつて幾年たつても上達することが出来ません元來將棋には天性に因て早く上達する人もありますが普通の人でも始めより能く筋道に依つて稽古して行く時は誰でも有段の指し人になれます然るに無筋の自己流ばかり指して居て下手固りに固つて仕舞てからは後に筋道を學んでも自己流と云ふ我儘と天狗心があるので何うしても上達が目に見えませんのであります定跡を學んで指すと却て負けるなど云ふ人がありますそれが即ち下手に固つて仕舞た證據であります然らば如何にせば將棋は強くなるかと云ふに始めから本筋に依つて

學んで行くに限りです。丁度學校で學ぶに小學校の一年級から順序を踏まなくては學士となれぬと同じ道理であります。將棋も「いろは」から順序を踏んで行けば自然に筋が立つて行きますから自己流の人のやうに行き止まらず何處までも進むことが出来ます。

之が爲めに本社では先きに「將棋手ほどき」「將棋定跡解」「將棋講義録」等の書を編輯して本筋を學ぶ人の便利に供へて置きました。が此比また書肆萬歲館の話に今一層初心者のために將棋の「いろは」からの書を編輯してもらひたいとの話であります。云ひかへれば少しも將棋を知らぬ人にも能く分るやうに且つ自然に本筋に道びくやうに心切に書いてもらいたいとのことであります。因て此書は始めて將棋を手にする人即ち駒の利き道から稽古しやうと云ふ人のために編輯いたします。が初めは駒の利き道から書ましても自然々々に本筋に導て参ります。

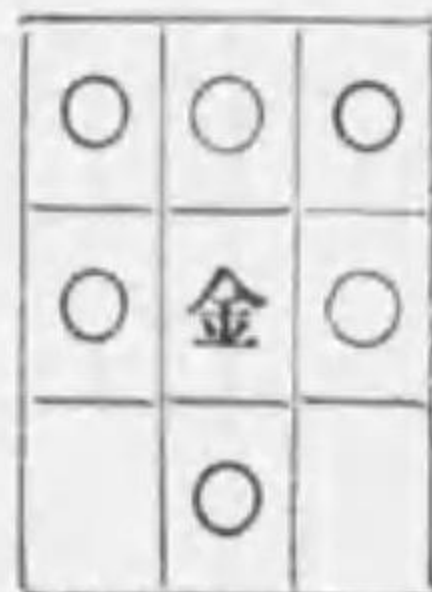
から全部を呑み込む後には下手固りに固つた人よりも性質がよくなりまして此後に前に記した種々の書に依つて研究して行けば終には素人離れがして立派な指し人となります。

將棋の駒き、道と並べかた

將棋の駒のき、道は大抵の人が知つて居りませうが「いろは」から學んで行く人のためには先づ順序として駒の並べかたと利き道から記します。將棋の駒は全體で四十個ありまして之を双方に分けますから一方が二十個づゝで之を次の圖の通り並べます。

又將棋の駒の中にて取ることの出來ぬは玉様計りで外の駒は捕虜てから又自分の方へ用ゆることが出来るのでありますから戦つて居る中には一方が多く一方が少なくなる場合があります。玉様は取れませ

「玉」とのみ云ひます其利き道は圖の如く八方へ一間づゝであります
 金將は略して「金」とのみ云ひます其利き道は前の三方と
 横の兩方と下の一方へ六個處へ一間づゝきゝます斜
 めに下の方へは左右ともに利きません
 銀將は略して「銀」とのみ申します其利きみちは前の三方
 と下の斜に二方へ一間づゝで横と下の直ぐへは利きま
 せん即ち五方だけで金より少し位が落ちます
 桂馬は略して「桂」とのみ申しまして其利きみちは圖の如
 く上の方へ一間飛んで斜めに利きますが外へは利きま
 せんから頭へ歩を打れて取られる事があります
 香車は略して「香」とのみ申します其利き道はまつすぐに豎に何までも
 利きますが後へは戻れませんが勿論前へは一間でも二間でも五間でも



ん代りに敵の玉様が逃げ處
 の無くなれば自方の勝で自
 方の玉様が動けなくなれば
 負けであります扱駒の名稱
 は玉金銀桂馬香車角行飛車
 歩兵の九種であります其
 數は金が四枚銀が四枚桂馬
 が四枚香車が四枚歩が十八
 枚飛車が二枚角行が二枚と之に玉將が二枚ありまして之を双方へ半
 分づゝに分けて同じやうに圖の如く並べるのであります
 玉將は俗に云ふ玉様で實は玉將でありますから略して



駒を並べた圖



て昔の人のでも今の人のでも指してある將棋を並べて見る事が出来るのであります。即ち圖の通りであります。重て申しますが、實用の盤には文字はなく、此に記したのは稽古のために用ゆる時の符牒であります。すから其つもりにお心得を願ひます。

圖の甲方が先手で數へた時の符牒で、若し乙方が先手であつたらば此圖を顛倒して、乙方が甲となり、甲方が乙となつて數へるのであります。

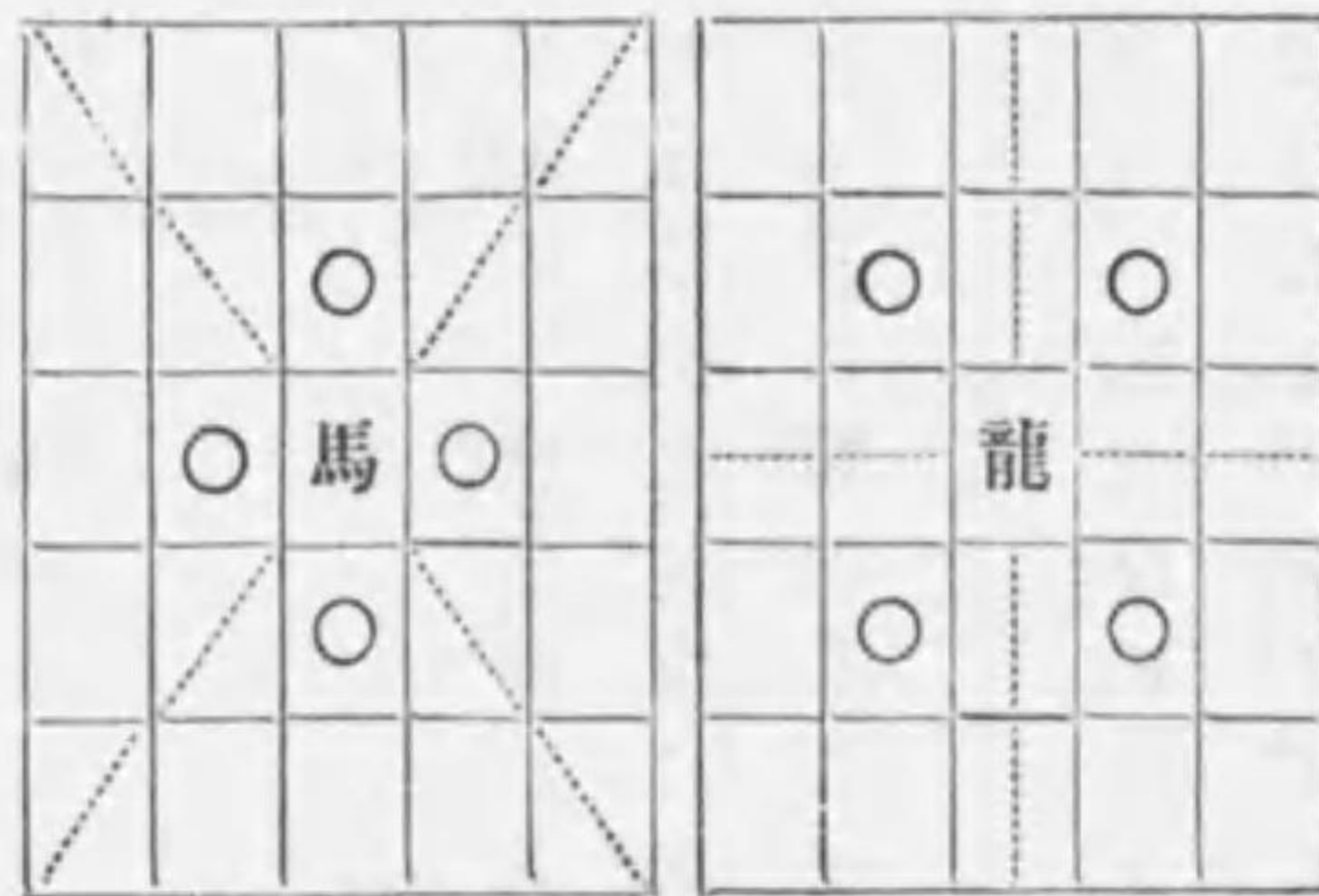
駒が化ると云ふ事と駒を取ること

駒が化ると云ふことは、飛角銀桂香歩は一度敵の陣中即ち向ふの三段目まで進み入る時は位が進んで利きみちが廣くなりますのを云つたものであります。但し化と化らぬのは自分の勝手で化ては却て都合が悪くと思ふ時は化なくてもよろしいのであります。然して化た時は駒

を裏がへして置きます。化て後の名稱と利きみちは左の通りであります。

飛車は化ると云ふと「龍王」と呼びかへ略して「龍」と申します。昔は王とも申しましたが、玉將とまざれば易いから、近比では「龍」の方が通り名となりました。

角行は化て「龍馬」となります。略して「馬」と申します。此二つは化ない時のやうに「飛車」は縦横に何處までも利く上にも四角へ一間づゝ利き角行は四角へ何處までも利く上に前後左右へ一間づゝ利きますから、大した利器となります。銀は化ときは金と同じことゝなります。金のきゝみちは前に出した



くきもでまこどは線點

通りであります「金」と書てあります
 桂は矢張「金」と同じことゝなります「金」と書く
 香も同様「金」となります「金」と書く
 歩も同様「金」となり」と書く
 玉將と金將は化れませんが
 化られる處へ行てもならぬと云ふ譯は化ては敵の玉將を「歩づめ」にする場合とか玉手をかけるに都合の悪いとか云ふ時に化ずに居るのであります
 但し此事は多く説明を要しますから後に實例を以て詳しく説明いたします
 又駒を取ると云ふことは敵の駒が我が駒の利みちへ来た時には之を取つて自分の駒を其處へ持つて行くのであります
 但し敵の駒が来て必ずしも取らなくともよろしいので自分の勝手に取ります此取る取

らぬも頗る説明を要しますから之も後に説明いたします

種々の規定

將棋を指すには種々の規定がありますが先づ知らざるべからざるのは左の件々であります
 敵の玉將を「歩づめ」にすべからず 敵の玉將を追ひつめた時に頭へ歩を打てばそれで敵の玉が行き處がなくなつて即ち詰みとなることもあります
 禁じてあります歩は身分の賤しき歩卒でありますから直ちに玉様の頭へ向つて玉の首を取るとは戒めておつて打ち歩では詰められぬのであります
 但し化て「金」の位に昇つた歩とか又突き歩と申しまして盤に並んで居た歩を突き出して玉將を詰めるのは許してあります
 之は既に戦功を立てたからであります

す前章に駒を化ぬと云ふのは此打ち歩で敵の玉が行き道がなくなる如き場所を前から考へて置きまして態と玉様を一手逃がして置いてそれからつめるためなどの用心であります

二歩を禁す 同じ縦の筋へは歩を二つ以上重ねて打つことが出来ません但し一つの歩が化つて居る場合には差支へありません之は歩と云ふ駒は双方に九ツづゝもあつて歩を二つ重ねて打つ時は勝手なことが出来て興味が少ないので二歩を禁じたので御ざいませう兎も角全部の半數近くもある歩でありますから多少制限をつけ

たので前章に記した「歩詰」を禁じたのも其邊の意味もあります

行き道のなき處へ桂香歩を打てず 此三つの駒は敵陣の中へ打ち込む時に最早や其先きが留つて居て打つた丈で動かす地のなき處へは打てません即ち桂は敵陣の二段と一段へ香歩は一段へ打てぬ

のであります因て我玉將が敵陣へ入玉となつた時に敵から飛角の申で遠くから玉手をかけられた時に外に間駒がなく桂香歩はあつても動かす地がなき時は之を間駒に打つことが出来ず其まゝ負けとなることがあります

千日手を禁す 敵の玉を詰めやうとする時とか其他にても此手が一番利益と思つて指します手を敵が防ぎまして駒を取つたりやつたりして同じ手を繰り返す如き事があり之を「千日手」と申します

何時までやつても果しがないからであります斯云ふ時は攻める方で三度目には外の手を指すのが定法であります攻められる方では何度でも差支へないので之は防ぎのためで據るないのであります

ますが攻める方は手段をかへなくては卑怯でありますから三度以上は同じ手を禁じます

此外に待手なども禁じたいのでありますが之は双方の相對で規則では禁じてありません併し本筋の稽古をするには待手をしては強くなりませんから初めから待つ手をせぬ習慣をつけるのがよろしいのであります

將棋の術語

將棋に關係して必要の語辭が澤山ありまして其語辭の中にはそれぞれ定まつた仕方がありますから是非とも知らなくてならぬものだけを記します

○先手、後手 先づ駒を盤に並べてから先きに指し始める人を先手方と申し次に指す人を後手方と申します同じやうの力の人では二番以上指さうと云ふ時には相對で先手後手を極め一度は甲が先手を指

し二度目には乙が先手を指し斯して互ひに先手を指しますから之を互先と申します併し双方が謙遜して「私が先手を指します」と云つて居ては果しがありませんから其時は駒を振て先手を定めるのであります謙遜して先手を指すと申すのは一手でも先きに指させてもらうのは私の方が少し弱いと云ふ意味でありますから先手を指しますと云ふのは謙遜の語辭でありますが何かすると此意味を間違へて「サアどうかお先きに」など云つて先手を譲るのを禮儀のやうに心得て居る人もありますが之は却て無禮に當るのであります扱駒を振ると云ふのは甲乙が先づ「私は歩」とか「私は金」とか云つて約束を定めて、それから一人が「歩三つを握つて之を盤の上に振りますさうして駒の表即ち歩兵と書てある方が二つ又は三つ出ますと始めに「歩」と云つた方が先手を指し又駒の裏即ち金の方が二つ又は三つ出ます時は始

めに「金」と云つた方が先手を指すのであります。マア籤を引くやうなものであります。且つ此駒を振るには始めに金歩と約束をせず振つても駒を振つた人の方は「歩」で振らぬ人の方は「金」に當ることに昔から定つて居りました。之を「ふり歩」と申します。故に相手が此方に駒を振らすることさへ承知であれば一々「金か歩か」と問はずとも直ぐに駒を振つて歩が多く出れば自分が先手を指してよろしいのであります。併し相手が其規則を知らぬ時は苦情が出るといけません。から矢張「金か歩か」と尋ねて後に振るのがよろしいやうであります。

○平手駒落 甲乙ともに同じ力と定まつて居ります時は盤面へ双方二十個づゝの駒を全部形の如く並べて對等で指しますから之を「平手」と申します。然るに誰でも同じ力と云ふ譯にまゐりません。強い人と弱い人とがありますから其強いのと弱いのが指します時は強い方が駒を一つなり二つなり其強いだけ落して指します。碁の方で弱い方が始めに石を幾干か置くのと同じ意味であります。之を「駒落」と申します。其駒を落す順序は左の通りであります。

香落 強き方が香車を一枚抜いて指します。香落は右を落す時と左のを落す時とあります。が現今では大抵左の香車を落すことになつて居ります。之は右の方には飛車が居るために落された方で利益が少くないのと左香落の方が興味の多き指し口となるので自然右香落が廢れて左香落の方が流行して來たのと思はれます。昔は右と左と交るゝ落したやうであります。が右香落の方は平手と左香落の間ぐらゐの力の違つた手合せに指しました。

○角落 之は説明するまでもなく強い方が角を落すのであります。之を俗に「大駒落」と申します。

飛落 之も文字の通り飛車を落すので之も大駒落であります
 飛香落 之は飛車と左香の二つを落すのでありまして一名を一挺
 半落とも申します一挺とは飛車の事半とは香車を指して云ふので
 あります

二枚落 飛車角行の二枚を落すのであります即ち飛角二枚落の略
 語で二枚落とのみ申します

三枚落 飛車角行と香車一枚を落します

四枚落 飛角と兩香を落します

五枚落 飛角兩香と一つの桂馬を落します

六枚落 飛角兩香兩桂を落します

之れ以上落しますのもありますが、それでは最早興味がありませんの
 で將棋を指すと云ふ部に入りませんから大抵は六枚落より外は指し

ません

○段割段の名稱駒割 將棋にも碁にも段がありまして何れも初

段より九段までの九級に分つてあります九段を最上高位として昔か
 ら九段以上の人はありません、さうして九段の人を名人と稱へまして
 一世に一人しか置きません、八段を半名人とも准名人とも申します七
 段を上手と申します此以下にもそれ／＼名稱があります、現今では
 稱へませんから省きます、總じて五段以上を高段と申します、現今五段
 以下の將棋をも高段など、申して居る新聞などもあります、それは
 僭上であり次に段に依つて駒を落す比例即ち駒割を記します

一段の差 即ち初段と二段の指す時は香平交とも「半香」とも申しま
 して二番を一組といたして始めに香落を指し次には平手(一段低き
 方が先手)を指します、即ち香落と平手と交て指しますから「香平交」で

二番の中うちで一度香きやうを抜ひきますから「半香はんきやう」とも申まをするのであります
 二段の差さ 左香ひだりきやうを落おとします略りやくして「香落きやうおと」と申まをします
 三段の差さ 「香角交きやうかくまじり」と申まをしまして一度は角かくを落おとし一度は香車きやうしやを落おとし
 ます二番一組はんひとくみで香角きやうかくを交かるゝ落おとしますので「香角交きやうかくまじり」の名ながあるの
 であります

四段の差さ 角かくを落おとします即すなはち「角落かくおと」と稱なづふ

五段の差さ 「飛角交かきまじり」と申まをしまして一度は飛車ひしやを落おとし一度は角かくを落おとし

二番一組はんひとくみで飛角ひかくを交かるゝ落おとしますから飛角交かきまじりの稱なづへがあります

六段の差さ 「飛落即ひおちすなはち飛車ひしやを落おとします

七段の差さ 「飛半ひはん」と申まをします「飛ひ」とは飛車ひしや落おとと云いふこと「半はん」とは一挺半いつてんはん

の略語りやくごで前章ぜんしやうに出だしました飛車ひしや香車きやうしやの二枚まいを落おとしたことでありま
 す故ゆゑに「飛半ひはん」と申まをしますと二番一組はんひとくみで一度は「一挺半いつてんはん」を指さし一度は「飛

車落しやらくを指さし交かるゝさしますのであります

八段の差さ 「一挺半いつてんはん」即すなはち飛車ひしやと左香ひだりきやうを落おとします

右みぎの駒割こまわりに依よりますと初段しよだんと九段くだん(名人めいじん)が差さしますのが「一挺半いつてんはん」であり
 ますから九段くだんに對たいして飛角ひかく二枚まいを落おとされる中うちは段だんに入いることが出で來き
 ませんのであります故ゆゑに二枚落まいおち以下いげは駒割こまわりが定さだまつて居ゐりませ
 手に其力そのちからによつて幾枚いくまいでも落おとすのであります而しかして駒こまを落おとした方ほうを
 「上手うはて」と申まをしまして落おとされた方ほうを「下手したて」と申まをします

○一局中いちよくちゆうの順序じゆんじよ 一局いちよく指さして居ゐる中うちにも普通ふつうの稱なづへがあります

先最初まづさいしよ双方しやうはうが指さし始はじめまして駒組こまぐみの出來でき上あるまでを「序盤じよばん」と申まをします
 それから双方しやうはうの駒組こまぐみが出來でき上あつていよゝゝ戰端せんたんを開ひらきますのを「分わかれ」と
 申まをします戦たたかひ既すでに關たがはして互たがひに入いれ亂みだれて攻せめつ攻せめられつして
 居ゐる時ときは「中盤ちゆうばん」と申まをしますいよゝゝ敵てきの玉將たましやうを追おつて次第しだいに終はりに近ちか

づくのを「寄」と申します敵の玉將を行處のないやうにして勝たる時を「詰」と申します

駒組の事 始めに双方が駒を盤に並べたのは陣法の配備でありまして之はまた戦闘準備にかゝらぬのであります、いよ／＼双方が駒をくり出して思ひ／＼に要處々々へ陣取敵を攻めるにも我陣を防ぐにも便利のやうに備へるが駒組で戦闘で云へば兵を展開して將に砲撃を開始せんとするのであります

分れと中盤 いよ／＼戦争が始つて一方は優勢となり一方は形勢の悪くなつたとか五分五分の形勢とか云ふ時が即ち「分」でありまして之を「分」がよかつたとか「分」が悪かつたとか又は「五分の分」など、申すのであります、扱優勢の方は勢に利じて敵陣に殺到せんとし形勢の悪しき方では之を盛り返さんと奮戦して未だ勝敗の定めがたき

時は中盤であります

寄の事 「寄」は即ち追撃戦でありまして一方を打ち敗つて最早勝利と見えまして敵の玉を一手々々に追ひつめる時のことであります

が油断して寄せそこなふ時は敵玉を逃して今度は却て身分の方が攻撃される事もあります故に寄が上手だとか下手だとか申すのであります

詰 玉將は敵の主將でありますから之を殺す即ち取ることは出来ません因て之を追ひつめて行き處のなくなるやうにするのを「詰」と申すのであります

將棋の戦状

○定跡と云ふ事 昔から多くの名人大家がいろ／＼指して見ま

して斯さしたならばよからうと駒組より分れの邊までを教へてあるのを「定跡」と申します強ければ勝つ勝てばよろしいには定つて居ります。が天性強く指せば必ず勝つと云ふ人はありませんから何なる人でも此定跡を稽古せなくては強くなれません。何分昔からの名人大家が研究に研究を重ねて之れならばよからうと教へてあるものであります。から之を學んで行くのが上達の順序であります。何程天性が將棋に長て居ても獨りの力では逆も研究がし切れません。故に故人の研究したものを手本として其上にて自分の考を出すのが利益であります。定跡は六枚落より平手までありまして其數は中々澤山であります。が順序を以て之を腹に入れて行けば自然に覚えられます。而して此定跡に明くなるほど強くなります。故に將棋を稽古するには第一に此定跡を稽古するのであります。因て此事は後に實例を出して詳しく申します。

○詰將棋 詰將棋とは昔の先生又は今日の大家が作つて出してありますので之は將棋の末の方即ち「玉を詰る處」だけを圖に依つて顯はしましたのであります。故に圖式とも申します。色々な六ヶ敷手で詰ぬやうな處で詰るのであります。何れも玉手々々で手すきなしにづめるのであります。必ず名手妙手があつて感心するやうに出來て居ります。故に「玉を詰める」ときの力を養ふには定跡について此詰將棋を研究しなくてはなりません。から此事も後に詳しく實例を出して説きます。以上定跡と詰將棋の書籍は昔から多く出て居ります。最も其中でよろしいと思ひますものは一々説明をつけて本社にて編輯して萬歳館から出版してあります。から追々御覽になるのがよろしい。

○指將棋 之は昔から今日までの名人大家の指した將棋の實戦を記留てあるので初めて出した盤の圖面の符牒に合せて並べて見ます。

と能く分ります之も力を養ふに必要でありますから定跡詰將棋の研究の傍ら並べて見るのが薬になります

○力將棋 之は敵が定跡に精しいから定跡で指しては損だと云ふ時又は上手方が下手をまぎらすために定跡を外れて力に依つて指しますので一名を「手將棋」とも申します元來定跡は下手の利益のやうに出來て居りますから上手が其利益を奪ふために力で指すのであります併し之に乗ぬやうに注意して指せば却て下手の利益があるのであります又双方が始めは定跡に依つて指して居ても中途から變じて双方が力將棋となることもありませう

○中押 將棋は角力と違ひ誰でも對等では指しません強ければ強いだけに駒を抜くのでありますから普通ならば双方が一手々々で攻めつ攻められつして敵の玉を詰そこなへば自分の玉が詰められると

云ふ處まで行くものであります何が何かすると失策のため又は駒の抜きかたが足らずに力に懸隔がありまして敵に玉手もかけぬ中に一方が詰められる事があります即ち中盤より平押にするので之を「中押」の勝と申しまして負た方は耻であります

○持將棋 双方の玉將が敵陣にかけ入つて仕舞ひ其傍らには金銀と金などが附て居りまして何しても詰ることが出來ず無勝負で了るのを「持將棋」と申します最も幾日もかゝつて何百手でも指して居れば終には勝負がつきませうがそれでは馬鹿々々しくて興味がありません故に双方入玉して玉の敵陣に入りたる時の名稱にて俗に「入り玉」とも申します(あたり)に護衛の駒がある時は大抵の處で持將棋とするのであります但し一方に飛角の大駒が三枚以上もある時は入玉しても存外早く詰ることがありますからさう云ふ時は双方が入玉しても持將

將棋の用語

棋には限りません指す處まで指して見るのであります

將棋に用ゆる語辭は前章に説きましたがそれより少し軽く單に其處だけに用ゐる語がありますから此に出します

○筋 即ち手筋の略語で「本筋」を指したと云ふ譽め詞であります之に

反してメチャクチャの手を指せば「無筋」と申します

○落手 之は見落しにて浮と悪い手を指した時の詞であります

○頓死 之はまだ詰ぬと思つて敵を攻めて居る中に急に自分の玉が

詰られる手があつて負けになるのであります

○傷み 之は駒を落して指す時などに其駒の無い手薄い處から攻めるを傷みを指すとも傷みを指れるとも申しますのであります

○質駒 敵の駒を何時でも取れるがイザ必要の時まで取らず居て其駒を取れば最早敵を詰める道具となる場合に至り飛車でも角でも切り棄て其駒を取らうと質に取つたやうにして置のであります

○逃げ越 玉將が其まゝ居ては危いと考へた時に玉手のかゝらぬ中に先きに逃げて居るので逃げ越し八手の徳ありなど、申して場合によつては好き玉であります玉ばかりでなく飛角なども逃げて居る事があります

○繋ぎ 總て駒と駒とは連絡をつけて置いて一つ取れる時は此方でも一つ取るやうにして置くのを「繋ぎ」と申します自分流に勝手に駒を組みますと此繋ぎがないのが出來ますから玉手飛車取れなどを食はせられますが定跡は能く研究してありますから駒と駒が自然に繋がつて居ります

○素拔 即ち繋ぎのないために只取られる事になるのであります

○間駒 飛角香で遠くから玉手をされた時に其道へ駒を打つて遮り
ますのを間駒と申します時に依て中途へ間駒して態と之を取らせて
から二度目に玉の傍へ間駒することがあります其中途に間するのを
「中間」と申しまして之には面白き手がありますから後に實例で示しま
せう

○遊び駒 戦鬪の局面へ遠かつて役目に立ぬのを遊び駒と申しまし
て成るべく遊び駒の出来ぬやうに全部の駒を活用するのが利益であ
ります其反對に成るべく敵の駒を遊ばせるやうに態と歩などをくれ
て其歩を取つた駒を遊ばせるのが巧みと申すのであります

○よる 横に動くのを申します

○すぐ 眞すぐに出るのであります

○飛ぶ 桂の跳るのを申しまして外の駒には飛ぶとも跳るとも云ふ
ことはありません

○走 香車に限りません

○突 歩に限ります

○引 之は何の駒でも後へ下るのであります

○打 之も玉將の外は何の駒でも手にあるのを盤へ打つことであ
ります

○取る 我が駒で敵の駒を取るのであります

○出る 前に進む時のことで多くは飛角などに用ひます

○化する 敵陣即ち向の三筋中に入つた時に駒を裏がへしまして出世
しますのを化ると申します又三筋中へ打つて之を動かす時にも化ま
す

○兩玉手と明玉手 一時に二つの駒で玉手を懸けることがあります之を兩玉手と申します又間に居た駒が動くため遠くに居る飛角香より自然の玉手のかゝることがあります之を明玉手と申します何れも後に實例で示します

○ければ 之は敵に利益のやうに見せかけて却て敵を不利に陥るるので即ちはめ手であります之も實例で後に示しませう

○必死 之は直接に玉手々と攻めずに一手すきくに攻めて行くので敵はどうしても防がずに居られぬこととなり終に詰められて仕舞のであります俗に云ふ待駒の如きものであります又此必死をければ敵玉が動けぬのでありますから「縛り」とも申します素人連は待駒を卑怯だなど、申して嫌ひますが更らに差つかへなく却てよろしいのであります之は最も必要の手でありますから後に實例を以て説き

ませう
○持駒 盤面に無く手にある駒を「持駒」と申します之は敵より取つた駒であります之は無暗に打たずに必要を待て打つのがよろしいのであります

駒の働きの主要

○金は餘り進んで行かずに成るべく自陣の守りにして置くのがよろしいのであります此駒は前は三方利きですが後へは一方しか利ませんから餘り進むと退くに困難して不利益に陥ります又敵陣へ打ち込む時も成るべく行きつまつた處へ打たずに動きの取れる處へ打つのがよろしいのであります且つ玉を守るにも玉を詰めるにも金は必要の働きを爲しますから容易に玉の傍を離れたり又は打つて仕舞ふこ

とを注意しなくてはなりません
 ○銀は戦鬪員であります歩の衝突の後には銀がくり出します之は引くにも左右兩方へ利きますから進むにも引くにも調法であります
 ○桂は敵陣を破壊するにも玉を詰るにも時々特別の働きを爲します桂馬は間駒の利かぬ駒でありますから敵の駒を隔て、玉手も出来る駒を取ることも出来るからであります然りながら此駒は頭の先きへ利きませんから餘り出過ぎる時は頭へ歩を打たれて取られます桂馬の高上り歩の餌食とは之れでありますから桂馬を動かすにも打つにも餘程機を見て働かせぬと役に立ちません且つ又此駒は手に持つて居りますと非常に敵を恐れさせますから成るべく大事にして置くのであります桂馬の禪と申して右へも左へも取れを懸けられますので喜んで桂馬の禪を懸けたがるのが素人の癖でありますが場合によつ

ては金銀よりも利益がありますから無暗に禪を懸けて金銀と交換するのは利益とは限りません
 ○香は成るべく前の方へ打つて廣く利益する事を考へなくてはなりません之は時に依つて飛車の代りを爲しますから之も無暗に金銀と替りたがつてはなりません手に持つて居れば敵が恐れて指し悪く思ひます
 ○飛車は敵陣に入つて働くに利があります
 ○角行は前へ引ひて居て働くのが利があります特に盤の中央(即ち符牒にある五ノ五)にある時は八方睨みの形があつて最も敵を恐れさせるのであります
 ○歩の利用法は最も廣ひので之は別に實例を擧げて詳しく説明いたします

實例各種

實例は指しかたを説てのちに示した方が順序であります。指しかたの説明は定跡と同じ處に説くことゝなりました。之は本書の半部を費すことになり、ますから繰あげて此に實例を出します。若し全く指しかたも知らぬ人は後に讀んでいたゞきます。指し方を知つて居る人は之を先きに讀んでも能く分ります。

○化すの實例 我駒が敵陣へ入つても態と化らずに居るのは例へば銀か桂ならば玉手をかけて先手をついける時などにやります。飛角は化ては敵の玉が歩詰になる時に態と化すに行つて一度玉を逃がし置てそれから化て詰める時などに用ひます。極簡短なる實例を圖にて示します。但し之は一例でありますからホンの形ばかりのものでありま

例實のすら化



先手方 一步

圖の如き場合に先づ角で敵の二三ノ歩を取り化ります。玉は一ノ一へ逃げる外ありません。然る時は一ノ二へ歩を打てば詰みます。が歩詰は禁じてあります。から打てません。然りとて外に駒がない時は詰めやうがありません。から斯云ふ時には角を化らす行くのであります。玉は一ノ一へでも二ノ二へでも逃げます。即ち一ノ一へ逃げれば一ノ二へ歩と打ち二ノ二へ玉を逃がして今度は三ノ二へ角を化り一ノ一へ玉が逃げれば二ノ二へ玉が逃げれば一ノ二へ玉が逃げれば二ノ三

れば二ノ一馬で詰み、一ノ一へ逃げずに一ノ二へ玉が逃げれば二ノ三

なくてはなりません其時に我方が先手となります此實例は次の「歩」の利用と題した説明の中にもあります

○詰將棋 將棋は一手でも早く敵をつめれば勝てありますから詰將は玉手々々で詰めて仕舞はなくてはなりません若し一手でも手を隙かせば自分の方が詰められる事になつて居るものと考へなくてはならぬのであります又持駒と云ふのは詰方の手にある駒で其外の駒は盤にある外の駒

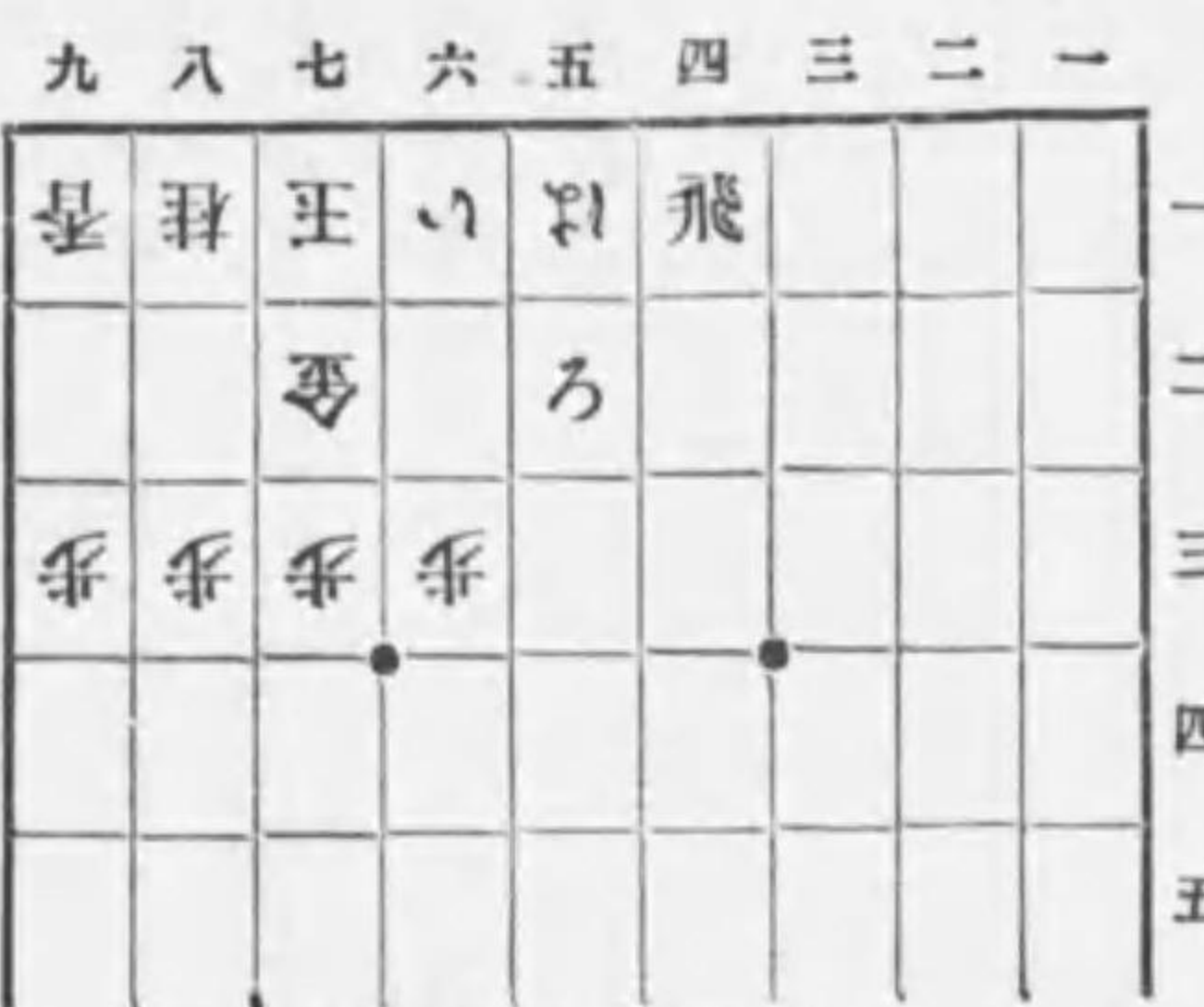


持駒 角、銀

例實棋將詰

金一ノ一玉二ノ二金でつみます

○中間の實例 圖の如く飛車で玉手をかけられた時に直玉の傍の「い」の處へ金を打つて間をしたでは敵の飛車は其まゝ居て別に先手で攻められます即ち「ろ」の處へ金を打たれ次に「い」へ打つた間駒を取らうとしますが此先手を避けて我方へ先手を取らうとするには飛車で玉手をされた時に一度は「の」處へ歩を打つて只でくれます其時飛車が「は」の歩を取つて再び玉手をしたならば其時に「い」の處へ金を打つて飛車へ當てますから飛車は其まゝ居られませんが「ろ」へ敵が金を打つても飛車を取つて仕舞ひますから何しても飛車は逃げ



例實の間中

ら玉方は之を自由に用ゆることが出来るのであります又現今では詰方は持駒を一ぱいに打つて仕舞ふ定めとなつて居りますが之は實戦には残つても差支へありません

圖の如き形であるとするれば八二銀打で同銀と取るより外はありません五一角打で之も同金と取ります六二へ間をしても飛角どちらで取つても詰みますから八五桂と飛びます之も同銀と取るより外はありません七二飛なると指せば之も同玉と取るより外はありません六四桂と飛び玉手をします之は歩で取りたくも香車の明玉手になつて居りますから歩で桂を取つて居られませんで六二玉と逃げるより外ありません其時に七二香化するで玉は行き處がありません之で詰め方は玉手々々で詰めて持駒が一ぱいでありませ又此詰將棋で兩玉手と明玉手の實例も示されて居ります

一通りの實例は凡そ説きましたたが「歩の利用」と必死の實例は最も大事でありませから之より特別に詳しく説きます之は能く盤へ並べて御覽を願ひます尙ほ重複のやうでありますが盤面の符牒につき再び申します初めに圖を出しました通り向つて手前を甲方とし向ふを乙方とし先手の方が手前に座つて甲方となり向ふの右の隅が「一ノ一」となりませ而して「一ノ二」「二ノ一」などの字を加へて居りますと文字が殖へて不經濟で且つ呼悪いので「〇」の字を略して「一一」「二一」と書きますから其つもりに願ひます又「同」とあるは敵の駒を取つて「同」ところへ我駒を持つて行くことでありませ

歩の利用 (歩をつかふの實例)

歩は將棋の駒の中にて双方に九ツづゝありますから殆んど全部の半數に近いほどであります、それゆゑ何しても歩を疎末にすることゝなります、然りながら將棋を指すのには歩の必要なることと丁度戰爭をするに兵卒の必要なると同じ道理であります、兵卒が澤山あるからと云つて之を輕んじた時は總敗軍となりまして如何なる名將が居ても戰は負けとなり、時に依りては一兵卒のために敵の大將を討取ることも出來、將棋も其通りであります、歩一つのために負け將棋が勝になることもあり、勝將棋が負けになることもあります、故に將棋の諺に「歩一つが鬼千匹に向ふ」と申してあります、初心の中は歩を使ふの妙味が分らぬのも無理はありません、能く其心得で居れば次第に歩を使ふことが巧になります、高段の將棋は皆此歩を巧みに使つてあります、すから名將の兵を使ふと同じやうに思はれるのであります。

扱此歩を使ふに三つの用があります

第一 歩を突きかけるの場合

第二 歩を打つの場合

第三 歩を化する事、即ちと金を作る事

第一の歩を突く場合と申しますと初め双方が定跡によりて駒を組み上げますと、それからいよいよ戰に取りかゝります、多くは先手から戰端を開くことになり、申しますが、扱何處より戰端を開かんかと云ふのが歩を突き出すの初めの手段であります、下手の處から突き出すと其歩は只取られて何の益もなき計りでなく、其處に傷が出て、始終指し悪い將棋となり、それゆゑ歩を突き出して敵に取らせる時には其處より切り込むだけの策戰を立て、からでなくては容易に突き出すことは出來ません、歩は後へ戻れませんが、一旦突き出した上は却て邪魔にな

ることもあり、其かはり甘く敵のすきに乘じて歩を突き出せば、自分の方では飛車先の歩をかわつて手に一ツ歩を持つことゝなり、結局飛車道が通つて手に歩があるやうになり、大に利益となることとがあります、次に又位取のために歩を突き出すこともあり、たとへば端の歩とか五筋即ち中央の歩などは大抵の場合には敵が一ツ突けば我も亦一ツ突つ置かぬ時は自分の陣が狭くなり且つ其處より攻め入らるゝことゝなりますから此位取りの歩も能く考へて突かなかくはなりませんが、それから飛車先の歩ばかりでなく自分の歩を突き出して置いて敵陣へ打ち込む手段もありますから歩の突き出しは頗る時機と場處を見なくてはなりません

歩を打つ場合は一層六ヶ敷のであります、二歩は打ぬために無暗に歩が打つてあると肝腎の處で歩が打てずに困難することがあります、故

に成るべく自陣へは歩を打たずに敵陣近くへ打つ考へを致さなければいけません、敵陣近くへ打つた歩は動けばと金に化りますから大に利益であります、又間駒などに歩で澤山の場合にも既に其筋に歩がある時は歩の間駒が打ませんから大きな駒を間駒にしないで、せん、それがために大事の持ち駒を使つて仕舞つて敵にかゝる段に至つても駒が不足してかゝることが出来ません、又其間駒が敵の質になつていざと云ふ場合に其駒を取られて詰めらるゝ時もあります、故に歩を打つには餘程勘考して打たなくては後に困難することがあります、其かはりに甘く歩を打ち込む時は其爲めに勝ちとなることとあります、昔伊藤看壽、大橋宗興と大事の將棋を指しました時に看壽の父、宗印(名人)が家にありまして心配いたして居りますと門人どもが其指し手を一々父の許へ告げて参ります、斯云ふ將棋は大事の手には數時間

を費やしますので門人が知らして参る暇があるのであります然る處
 又々門人が参りましたして「只今若先生(看壽)が四一步と打ちましたと云ふ
 や宗印は「ア、それでは看壽が勝ちとなつた、それでモ一安心だ」と云つ
 て其から釣竿を掲げて魚釣に出かけたさうで御ざいます、其棋譜は將
 棋新報の第一卷第三號に掲げてあります、同號は既に賣れ切れて新
 らしき讀者諸君の手に入りませんから其棋譜を末に掲げて置きます
 此四一步を打つたゝめに勝になり、それが早くも宗印に勝ちと安心さ
 せたほどでありますから歩の打つ處は大事のものであります
 又第三の金を作る場合と云ふのは暇さへあらば敵陣へ歩を打ち込
 んで機を見て之を化り段々と敵の玉の近くへ寄せて行く考へをする
 のでありますと金は身方にとつては金の働をなしますが敵に取つて
 は歩にしかつかへぬのでありますから之れほど身方にとつて利益の

ものは無く敵に取つて不利益のものはありません故に早くと金の二
 ツも出來た將棋は大抵勝ちになるものであります
 此外にも歩の必要なること歩の用ひやうは説きつくせぬほどありま
 す、が實例を擧げなくては會得が出來ぬ方もあります、左に一ツ
 の實戦の例を擧げて其場合々々で説明いたしませう、此將棋は現今の
 某五段と四段とが此比さした新らしき棋譜であります、が某五段の方
 は却て歩の打ち處を誤つた處があり四段の方は面白く歩を使つてあ
 りますから参考となり、(印)印先手は四段、(印)印後手は五段、

圖一六歩	圖四二銀上	圖五九金左	圖四四歩
圖三六歩	圖八四歩	圖五六歩	圖八五歩
圖七六歩	圖八四歩	圖五六歩	圖七七角
圖五八飛	圖六二銀	圖六八銀	圖三四歩
圖三八玉	圖三二玉	圖二八玉	圖五三銀
圖一六歩	圖四二銀上	圖五九金左	圖四四歩
			圖三八銀
			圖一四歩
			圖四八玉
			圖四二玉
			圖五四歩

右の中にて歩の突き出しにつきて實例を申しますと、五、六歩に對する、五、四歩と、一、四歩に對する、一、六歩は、即ち位どりに負けぬためでありまして、七、七角と出たのは、敵に八、六歩、同歩、同飛と飛車先きの歩を替つて、一歩持たれて且つ飛先きを通ふさせぬ實例であります、それから、五、九金に對して、四、四歩と突たのは、之れは後手方が自分と角道を留めて仕舞つたのでありますから、丁度戦争の際に自分の重砲の前に兵隊を並べたやうなもので、歩の突きかたを誤つた一例であります、某々高段の評に、此處では、四、四歩は面白くないから、此手で、七、七角なる、同銀、三、三銀と指すのがよろしいと申されました、斯云ふ風に角を替つて置くと、先手方は美濃圍であるから、後手方に角を持たれて居ると、大に危嶮があるから、指し悪いのであります、美濃圍に恐ろしいのは、角と桂馬でありまして、角を後に、四、六、五、五、六、四の邊から打たれ

る場合があるとするれば、桂を三、六へ打たれて、大事に及ぶのと、又は一、七から角を打たれて、玉の行き處の無なる手がありますので、美濃圍には、角桂を持たれると、大に困るのであります。

五、七銀、五、二金右、六、六銀、四、三銀、五、五歩
 いよ／＼駒組みが出来上りましたから、先手から、五、五歩と戦端を開いたのであります、此場合は、外に歩の突かけ處もありませんから、此五歩などは、先づ突きかけ處でありませう。

- | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|-------|
| 同歩 | 同銀 | 五、四歩 | 六、六銀 | 六、四歩 | 七、五歩 |
| 四、二金上 | 四、六歩 | 九、四歩 | 九、六歩 | 八、四飛 | 八、八飛 |
| 一、三角 | 六、八角 | 二、四角 | 七、七銀 | 六、五歩 | 八、六歩 |
| 同歩 | 同銀 | 六、六歩 | 同歩 | 九、三桂 | 五、八金左 |
| 八、五歩 | 七、七銀 | 七、四歩 | 七、六銀 | 六、四銀 | 七、八飛 |

此 八六歩 八八五歩
 此 八五歩は先手方が打ち處を誤つたので之がために損失を招くこ
 とゝなりますのは此次の指しかたで分りますが此八五歩は八八歩と
 受けて打つのが安全であつたのであります之も歩を打つに疎略の考
 へすべからざる一例であります

- 同桂 八六角 七七桂 八五歩 七八成桂 八四歩
- 八八飛 八七飛 同飛 同銀 八八飛 七四歩
- 七五歩 七八銀 同飛 六一飛 八九龍 六五歩

此通り先手方は八五歩の打ちがよろしくなきたため銀を一枚損を致し
 ました若し八八歩と打つて置けば此なことはないのであります、それ
 から又八九龍で其次には八六に居る角を取られる手順であります

此角を逃げて居ては受け太刀と計りなりて見込みがありませんから
 此角を棄て六五歩と銀を取りに參りました此歩は強い歩で角を取ら
 れても銀を取つた上に其次に六三歩と化りますから却て大利益とな
 つて次には金も取れます故に後手方も角を取つて居られませんで五
 七銀と逃げたのであります

- 七五角 四六角 四七金
- は三六桂と打たせぬ爲めであります
- 五五角 六四歩 三五桂 四八金

此三五桂は關根八段の評に少し早や過ぎると云はれましたが成る程
 之がため金を引かれて却て先手方の玉の邊が固くなりましたのみな
 らず後手方に桂が無くなりましたから三六へ打たれる恐れが無くな
 りました

六二步 三七步 六四銀

此邊から先手方は歩を巧みに利用し始めましたので御ざいます後手方は敵が六三步なると指されては金銀の中を取られますから六二歩と受けたのであります先手方は更らに側面より三七歩と化り次に六三步と化らうと計りました何分此處へ先手方の歩が三つ迫つて居りまして之が一ツ動けば一ツづゝと金となるのでありますから殆んど金が三枚並び進んで来たやうな趣きがあります殊に此と金ほ後手方が取つても歩に過ぎぬのでありますから金の三枚来たよりも始末が悪いのであります之に反し後手方は三筋四筋の歩が切れて居ませんから敵の玉の邊へ歩を打ち込むことが出来ません若し後手方の四筋の歩が切れて居りますれば四七歩と打ち込み段々に敵の金銀を薄くして仕舞ひますが歩が切れて居ませんため四七銀と打ち込んで

同角 同角 六二と

金銀の交換だけで果しがありません此邊が歩を切つて置くのと歩の切れて居らぬのでは勝敗にも關する程の相違となります扱後手方は自分の方の四筋の歩が切れて居らぬ爲めに四七歩と打ち込めませんから敵の歩を防ぐより外なく六四銀と歩を取りましたのであります此處で先手方は角を棄ても敵陣へと金を繰り込む目的がありますから

七五角

と飛車の筋を逃げました此七五角は逃げた許りでなく序でに攻勢を

取つて棄て置けば四八角なると金を取り先手が同金と角を取れば七
 九角打で後手の勝となる程の手であります此處で弱人ならば五筋か
 ら歩を打つて角道か飛車道か(八九龍の横ぎ)を止めるため五七歩又
 は五九歩の二ツの中しか歩を打てぬでありますが先手方も流石は大
 家で御ざいますから

六六歩

と中途へ歩を打ちましたが(即ち中間の一例此歩は頗る妙歩でありま
 して後手方は容易に此歩を取ることが出来ず暫く角を立ち往生をさ
 せられました其譯は若し六六の歩を同角と取れば先手方は五二と、
 金を取ります其とを同銀と取れば角を飛車に取られます角を逃げれ
 ば更らに四八と、金を取られて負けになりますから六六の歩は角で
 取ることが出来ません實に此六六の歩は面白中間でありますして妙處

があります扱後手方は六六歩のために角が使へなくなりましたから
 最早グヅ／＼して居ては危くなりましたから

四七銀打

と打ち込みましたか歩ならば後手方も困りますが金銀の替りでは恐
 ろしくありませんから

三九銀打

と受けました後手方は三八銀と敵の銀を取つても同銀と指され元々
 通り四八銀と取つても金銀の替りだけで効能がありませんから方法
 をかへて

九九龍

と指しました先手方は敵に四七へ歩の利かざるため安心して居たが
 後手が歩の代りに香車を打うと云ふ考がへで香車を手に入れました

から最早捨て置きませんで

図五九歩打

と龍王の道を塞ぎました此通り歩で防ぐ事の出来たのも初めに六六歩と中間をしてあつたから五筋へ歩が打てましたが初めに五七へ歩が打つてあると困つた處でありました此邊は皆歩を使つての戦かひの實例であります

図八八龍

図四五歩打

図四八銀

図同金

図四六香打

先手の四五歩も若し同歩と取れば直ちに四四歩同銀と取らせて後に五二と、同金、四一銀と攻めんと巧みであります後手方は此四五歩は取れませんかから捨て置いて四六香と目的通り歩の代りに香を打ちました

図五八桂打

図四八香

図同銀

図五六角打

図二六

図四一金打

図五二と 同銀

後手に金を一つ使はせたから先手は始めてと金で敵の金を取りました此處が甘ひのであります早く取りますと五二と同銀で飛車に當りますから飛車を逃げて居ると敵に金を二枚持つて居られて危いから一枚つかはせてのちにと金を寄せたので御ざいます

図九一飛

図六六角

図四九金打

図五五角

図九三龍

図八三步打

五五角と龍を取れと参りました次には五八龍と桂を取つて三六から打たうと云ふ含みもあります先手は九三龍と逃げて次には二三龍で詰めやうと云ふ含みで逃げながらも只は逃げません後手の八三步は一寸面白く留めたやうに見えましたが之は誤まりで却て先手に利益となりました矢張六三步と留めた方が宜しかつたので此歩は打ちまこないの實例となります歩の打ち處の大事たるのは此處でも分りま

す

龜三六銀打 龜七七角なる 龜八三步なる 龜四五歩 龜七二と

此通り八三步が悪かつた爲めにと金を一ツ作らせ其と金が段々近よつて來まして矢張り二三龍の手がありますから又々

龜八三步打

と留めなくては爲りませんつまりと金を作らせた丈が大なる損でありました六三步と打つてあれば此な事はありませんでした注意すべきは歩の打ち處であります

龜六二と 龜四三銀 龜九一龍 龜三三馬 龜五一と 龜三一金

龜四四歩打 龜同銀

恐ろしきと金となりまして又々金と替りさうになりました且つ四四歩も面白い歩であります一ツの歩で銀を吊り上げて玉の固めを薄く

し又龍馬の道を止めて仕舞ひました歩の使ひ方も此處に至つて益す妙であります

龜六一龍 龜四六歩 龜五二と 龜四七金打 龜四二と 龜同馬

何で御ざいます後手は前の八三步の打ち處が悪しかりしたため先手は之を利用して又々歩一ツで金を取りました

龜四三歩打 龜同玉 龜四五歩打 龜三八金 龜同金 龜四五銀

龜同銀 龜同角 龜三六銀打 龜八五龍

又四三步と四五歩で後手の玉の頭へかゝる手がゝりをこしらへましたから後手は敵にかゝつて居られませぬ種々考へました金が一枚足らぬので先手をつめられませぬ據ころなく八五龍と引き防ぎにかゝりました之も先手がと金を寄せる前に後手に金を一枚つかはせて後に戦争にかゝりましたから後手は金氣が不足して如何に考へて

も詰みがなく防ぎのため大事の龍を引くことになりました

龍六五金打 龍四七銀打 龍四五銀 龍六五龍 龍四四金 龍三二玉

龍二三香打 龍同玉 龍三四銀 龍一三玉 龍六五龍 龍二四金打

龍二五香打 龍二二香打 龍六三飛打 龍二三步打 龍三五龍 龍二五金

龍同銀 龍一二玉 龍一四銀迄

三五龍は金で取れませんが取れば二三香なるで後手が負けますから二五金と香を取りましたが最早や先手の勝と定まりました此の一局は皆先手方が歩を巧みに使つて勝になりましたに反し後手は八三步の打ちかたが悪しかりしたため負けたと云ふ程の事でありませす歩の利用につきては斯如く恐ろしきものでありますから歩は疎末に棄て又は考へなく打つてはなりませんのであります此後は何しても先手が勝ちます

前に出した宗與と看壽の將棋は左の通りであります(將棋は平手の時は弱き方が先手なるも駒を落した時は總て駒を落した方がいつも先手也)

右香落 八段 大橋 宗與

勝 五段 伊藤 看壽

二六步、三四步、二五步、三三角、二六飛、二二飛、四八銀、三二銀、四六步、六二玉、三六步、七二玉、六八玉、六二銀、七八玉、八二玉、四五步、一四步、五八金右、七二金、三七銀、一五步、三五步、同歩、四六銀、一六步、三五銀、一七步なる、二四步、一六と、五六飛、一二飛、二三歩なる、同銀、四四步、三二銀、四三歩なる、同銀、三四步、二二角、二三歩、一三角、三六飛、一五と、三七桂、三二歩、七六歩、五四銀、四四銀、四六步、四二歩、同金、五五銀、四三銀、四六銀、二五歩、三五銀、四一歩(此歩が勝ちとなりたる歩なり)以上圖面までの指し手

七七角、二六と、同銀、同歩、一四歩、二四角、二二歩なる、一四飛、二三と、二七歩なる、二四と、同飛、一角なる、二六と、四六飛、三七と、七七馬、五四銀、八六香打、二八飛なる、二二歩、一三桂、二一歩なる、三六桂打、三一と、三五銀、三六飛、同銀、七五桂打、四三銀、六一角打、七一玉、七二角なる、同玉、八三桂なる、六一玉、三二と、同銀、三三金打、二四龍、三二金、同金、三三銀打、三四龍、三二銀、

下 手 看 壽

	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
一	皇	将				歩		将	皇	一
二		王	馬	馬		馬	馬		飛	二
三	歩	歩	歩	歩	歩	馬		歩	角	三
四							歩			四
五							銀	歩	?	五
六			歩				飛			六
七	歩	歩		歩	歩		桂			七
八		角	玉		金					八
九	香	桂	銀	金						九

上 手 宗 與

持駒 宗與氏歩
看壽氏歩

同龍、三三金打、五二龍、三二歩、三八飛打、四四馬、二五角、三五馬、四八と、六八金よる、四七銀、二五馬、同桂、三四角、八五歩、同香、八六歩、同歩、五四角、五二角なる、同玉、四三歩、七五銀打、七七金、五八と、八七玉、六九と、四六飛打、五五角打也(此將棋互ひに能く歩を使用す)

は め での 實 例

「はめで」は俗に云ふ「ケレン」でありまして一方が態と隙を見せて悪いやうに思はせ敵が其手に乗て來れば忽ち恐い目にあはせると云ふ手段であります、上手が下手を負かすには能くこの手を用ひますから注意せぬと恐ろしい目にあひます其「はめで」の種類は澤山ありまして將棋新報にも時々講義してありますから追々御研究なさるがよろしいが此處にはホンの雛形を示すために六枚落ちで上手が下手を「はめる」形

を一寸出します、六枚落ちの指しかたは後に出しますが此處に先づ普通の形を申しますと

四八金、三四歩、八八銀、四四角、二八銀、一四歩、四六歩、五四歩、三六歩、一五歩、三七金

と云ふやうに指して行くのでありますが「はめ手」を指さうと云ふ時には上手は先づ六八玉と指し、下手方七六歩は常の通り上手は七八玉と指し、下手四四角と出た時に上手は三四歩と態と角のなれるやうに誘ひの隙きを見せまますから下手は縮たと九九角なると指しますと上手八八銀で成角(馬)を取らうとします九八馬と逃げると七九金と寄り下手が何の手を指して居ても上手は次に八九金と寄て馬と金との交換を逼ります下手は「はまつて馬を金か銀と交換するより外なく上手に初めから大駒を持たれては下手はモ一勝てません之が「はめ」の一例

でありましに何の將棋にも之に似た手があるので御ざいます

必死の實例 (龜印上手方、魚印下手方)

必要は黒人のさした將棋を並べて見ますと何將棋にも大抵實例があります。此處に出しますのは某八段と某六段が指した香落將棋の末の方でありまして、下手方の六段が二五桂と打つた處であり、す前の方は必死の實例に關係しませんから、此處から出します。即ち圖の通り下手が二五桂と打つたのは必死の始りであり、之から下手方は必死々々と攻め立て、上手方は能く之を防ぎ、双方秘術を盡して居りますから、實例に出します。

此處二五桂を捨置けば、龜一七桂なる龜同玉、魚二五桂の打で後は詰みがありますから、上手は魚二六銀打と受けました。次に龜一七桂なる

桂なるで今度は上手から下手へ必死を懸けました捨て置けば兪一二香なるで詰みますから下手は兪一一步と受ける上手兪九一馬と香を取ると必死であります捨て置けば上手は香を手に入れてあるから一一香なる同玉一七香打一二間同香なるで詰みます此處九一馬で香を取るなどが質駒を取った實例で縁の離れた處で之も必死になるのであります因て下手は兪二二金と打つて答へて見ましたが上手は兪同成桂兪同銀と取つた時に上手は兪三五香と打つて飛車取りと云ひます下手は飛車を逃げれば三二香なるでも三二金でも詰みます然りとて此處で飛車を渡しては忽ち玉の横から打たれて到底防ぎ切れませんから此處で下手方は抛げて負といたしました此の將棋の如きが一局で「寄」の實例とも「必死」の實例ともなるのであります

將棋の指し方

總説

將棋の指し方と申しますと其廣義に於ては初めの歩の突き出しから一方の玉將が詰までを申してよろしいのであります此處に申しますのは始めて將棋を稽古しやうと云ふ人に駒組から戦端の處までを説明いたすための題名に用ひたのであります又前章にも申し述べ通り將棋は一局の中に順序がありまして一度に之を教へると云ふことは困難でありますから始めて將棋を稽古しやうと云ふ人は先づ最初に駒組を覚えて其後に順序を以て稽古するのが後に強くなる下地であります素人連は始めから何も彼も覚えやうといたしますので筋が立たずに一生策將棋で了りますそれ計りでなく順序を以て筋を稽古

して行くのが面倒だと云ふので自分流で無筋に戦つて計り居りますから終には下手固りに固まつて後に本筋を稽古しやうとしても我流と云ふものが邪魔になつて上達いたしません此書は其弊害に陥らず始めから本筋に依つて稽古する心得の人にみせるためでありますから一時に何も彼も説かずに先づ駒組みを説いて將棋と云ふものは斯云ものだと云ふことを悟らせるやうにいたすのであります因て此書で將棋の意味と駒組を覺えたのちに曩に本社で編輯した將棋の書類とか將棋新報とかで段々と奥の方へ進んで稽古する時は全く本筋に涉んで行つて立派な指し手になります將棋の稽古は生まじいに我流に出来る人よりも全く指した事のない位の生の人の方を歓迎するのであります生の人ならば順序に依つて稽古してさへ行けば必ず本筋の指し人となれます

將棋の名稱

扱將棋の駒組を説きますに先ち將棋に種古の名稱あることを説きます即ち双方が對等にて指すのを「平手」と申します其次に香車次に角次に飛車次に飛車と香車次に飛角二枚それより尙ほ落して指すのもあります此事は前章に委しく申しましたから大略といたします將棋には此通り平手から二枚落ち又は六枚落ちまでもありますから其駒組みには數の知れぬ程に各流各種の差別があります數知れぬ程と申しまして決して落膽するには及びません順序に依つて覺えて行けば自づから腹に入つて行くものであります取り分けて平手には其駒組みの流々が多くあります因つて此平手から説て行く事にいたしました

平手の駒組

平手の駒組は左の數種が普通に行はれて名のあるものであります

- 相懸り 二十八手組
- 間飛車 向飛車 袖飛車 中飛車 雁木 居飛車
- 三筋
- 櫓圍 石田 美濃圍 四

大體は右の如きものであります。之が又種々に枝が生まれて例へば相懸りの中にも横歩取りがあれは櫓圍にも相櫓圍など、云ふ名稱があると同様に何れにも異つた駒組があります。然れどそれは中途よりの分れて始めの駒組は大略右に記した如きものであります。之を順序に因て説明いたします。

相懸り

さていよいよ本文に移りますが又々お断りをいたして置きますが之を學ぶには能々盤面圖の符牒を暗記して居りませんと右と左が違て不明なります。すから始めは盤に符牒を記つけて置くなど、がよろしいと思ひます。而して何れも手前の方が先手であり、ますから向ふの右の隅が一の略して一一手前の左の隅が九の九略して九九であります。

相懸り二十八手組の圖

九	八	七	六	五	四	三	二	一
皇	将		将	王	将	将	皇	一
			将		王	将		二
将			将		将	将	将	三
	将	将		将		将		四
								五
		歩		歩		歩	飛	六
								七
歩	歩		歩		歩			八
	角	金			銀			九
香	桂	銀	玉	金			桂	香

持駒 双方歩二つ

一一手前の左の隅が九の九略して九九であります。

す(金)印先手(金)印後手

- 金七六歩 金三四歩 金二六歩 金八四歩 金二五歩 金八五歩
- 金七八金 金三二金 金二四歩 金同歩 金同飛 金八六歩
- 金同歩 金同飛 金二六飛 金二三歩 金八七歩 金八四飛
- 金四八銀 金六二銀 金五六歩 金五四歩 金六九玉 金四一玉
- 金五九金 金五一金 金三六歩 金七四歩

右の通りに双方が同じやうに駒を組み上げますから相懸りと申しますので平手將棋は此相懸りが一番正しきものといたしてあります故に第一番に出しましたのであります以上が双方合せて二十八手ありますから之を二十八手組とも申します最も二十八手組と別に名稱をつけたものありますから此相懸りは單に相懸りとのみ申して置きます

又此駒組では先手も後手も金を横に寄つて居りますが之を「五一金」と申します最も後手方は此金を横に寄らずに左へ斜めに即ち「五二金」と上るのがあります之を「五二金」と申します先手が「五一金」で後手が「五二金」と上るのは先手方は後に飛車を切り棄てた時に二九飛と打たれても直ぐに玉手にならぬために玉の傍へ金を寄て置くのであります後手方は飛車を切り棄てる含みでありませぬから「五二金」と上るのであります但し此圖は双方が玉の傍らへ金を寄つたので何れも「五一金」の形であります

扱ひよ、駒組が出来あがりしましたから之から戦争に及ぶのであります何れも先手が仕懸ける順序であります元來平手の將棋となりますと只一手の前後だけでありますから先手だからとて一手不用の手を指して居れば忽ち後手となる道理でありますから先手

が必ず勝てる」と云ふ極めはついて居りませんが然りとて先手は一
 手先きに指すだけに何處かに利益がなくてはなりません故に先手
 から先づ仕懸けて行く事に成ります
 茲に初めての稽古する人に説き示して置きますが將棋は先づ始め
 に角道を明け次に飛車道を明けるのが普通でありますから何の將
 棋でも先手は先づ「七六歩」とつきます次に飛車を他へ廻つて指さう
 と云ふ時は格別のことであります居飛車と申して居たなりの飛
 車で指さうとする時は「二六歩」と飛車先の歩を突くのであります之
 は戦争にたとへて見れば飛角は大砲でありますから大砲の筒先は
 早く敵に向けて置くのが法でありますそれで後手方も「三四歩」と角
 道を明けた時に直に先手から「二二角」と角を取りかへるのが素
 人に能くあります然する時は後手が「同銀」と角を取つて上ります

ので後手の方が銀の上つた丈一手徳となつて忽ち後手が先手とな
 りますから先手方は損であります最も其取つた角を「四五角」と打ち
 込んで左の「六三」へ化せなければ「三四角」と行つて歩を一つ儲けやう
 と云ふ考への人もありまして之を「筋違角」と申しますが敵に同じや
 うに指るゝ時は矢張り同じ結果で後手に銀の上られた丈が損の手
 となりますのであります又後手方は「四四歩」と角道を留めて指すこ
 ともありますが之は換圍ひか四間飛車に廻はらうとか何とか外の
 手を指す時の事でありますが先手方は「六六歩」と角道を留めることは
 少なく關根八段などは嚴く此ことを尤めます之れらの事は追々に
 説きませうがさて前段の如く双方二十八手の駒組が出来上りまし
 た後に先手より仕懸ますのに色々ありまして之を一々説いて居ては
 それだけで一冊の本にもなりますから此處には其一例を挙げます

扱二十八手の駒組が出来まして互に桂馬を上り先手は仕懸けとして「三三歩」の打ち込みが普通となつて居ります即ち左の如くであります

- ③三七桂 ③七三桂 ③三五歩 ③同歩 ③三三歩 ③同金
- ③同角 ③同角 ③二三飛 ③三二銀 ③三三龍 ③同銀
- ③二二歩打 ③四四銀 ③二一歩

之れまでが分れてありまして此後は色々の變化がありまして其人の技倆に依ります又「三三歩」の打込みを同金と取らずに同桂と取れば「五五歩」と突き同歩同角として歩を一ツ手に持ち三四歩と桂の頭へ打ち込む含みで指せば先手がよろしいとしてあります

櫓圍(又相ひ櫓)

櫓圍とは玉將を金銀で圍んで其形が櫓の中に立て籠た様に見えるますので櫓と申しますすが時によつて一方だけ櫓に圍んで一方は他の駒組をするのもあります此處には櫓の駒組を説明するのでありますから双方が櫓に圍ふ場合ひ即ち相櫓と申して同じやうに組み上げ矢張り先手より仕懸けの手順を説きます

圖の櫓相

九	八	七	六	五	四	三	二	一
皇	将						将	皇
	飛				馬	馬	王	
		馬	馬		馬	馬	馬	
	馬			馬	馬	馬	歩	
歩		歩	歩	歩			歩	歩
	歩	銀	金		歩	銀		
	玉	金	角				飛	
香	桂						桂	香

持駒 双方歩一ツ

將 棋

先七六歩 後三四歩 先二六歩 後四四歩 先四八銀 後三二銀
 先五六歩 後五四歩 先三六歩 後八四歩 先七八銀 後六二銀
 先二五歩 後三三銀 先五八金右 後八五歩 先七七銀 後五二金右
 先六六歩 後四三金 先六八玉 後四二玉 先七八玉 後三二玉
 先六七金 後七四歩 先七九角 後三一角 先八八玉 後二二玉
 先七八金 後三二金 先三七銀 後七三銀 先一六歩 後九四歩
 先九六歩 後一四歩 先三五歩 後同歩 先同角 後三四歩
 先六八角 後七五歩 先同歩 後同角 先七六歩 後四二角
 之で同じやうに組み上りました即ち相ひ槽であります之より先手の仕懸けは色々ありますが先づ普通の分れを左に一例として出します

先四六歩 後六四歩 先三六銀 後七四銀 先四五歩 後同歩

槽 又 相 ひ 槽

先三七桂 後六五歩 先同歩 後七三桂 先四五桂 後四四銀
 先二四歩 後同歩 先二三歩打 後同金 先二五歩打 後同歩
 先二四歩打 後同角 先同角 後同金 先四六角打 後五一角打
 先二四角 後同角 先二五銀 後四六角 先三四銀 後二八角
 先二三金打 後三一玉 先四三銀 後四一玉 先四四成銀 後五一玉
 先五三桂 後六一玉 先六三銀打 後同銀 先同成桂 後六二歩
 先八三銀打 後同飛 先七二金打 後五一玉 先六二金 後四一玉
 先四二歩 後三一玉 先三二歩 後四二玉 先五二金

之れにて先手の勝であります但し此通りに指せば先手が勝りますが後手方は之を途中で工夫して紛らしますから必ず此通りにもまゐり出しますまいが先手は先手丈の徳がありますから手本としては此通り出してあるのであります

袖飛車

袖飛車とは重に後手方が指しまして(先手は居飛車が徳であるから) 飛車を左へ一間寄る 即ち飛車が「七二」へ寄つて丁度袖の形となりますので此名稱が 出たものと見えます 其駒組は左の如くであります

- 飛七六歩 飛三四歩
- 飛二六歩 飛四四歩
- 飛二五歩 飛三三歩

袖飛車の圖

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂		王	王	香	香	香	香
		飛						
	香	香	香	香	香			
			香			歩		
		歩		歩	歩			
歩	歩	銀	歩	歩			歩	
	角	玉		金	銀		飛	
香	桂		金				桂	香

持駒 先手方歩
後手方なし

積 飛 車

- 飛四八銀 飛三二銀 飛五六歩 飛五四歩 飛三六歩 飛四三銀
 - 飛六八玉 飛六二銀 飛七八玉 飛五三銀 飛六八銀 飛七四歩
 - 飛五八金右 飛七五歩 飛同歩 飛六四銀 飛七七銀 飛七二飛
 - 即ち此「七二飛」が袖飛車であります之れから先手の仕懸けでありますして其一例として分れを申しませば
 - 飛七九角 飛七五銀 飛二四歩 飛同歩 飛同角 飛同角
 - 飛同飛 飛二二歩 飛二三歩 飛七六歩 飛八八銀 飛三二金
 - 飛二二歩 飛同金 飛七三歩打 飛八二飛 飛七二角 飛二三歩
 - 飛六一角 飛同玉 飛二五飛 飛六四角打 飛七二金 飛同飛
 - 飛同歩 飛同玉 飛七四飛 飛七三金 飛七五飛廻
- 之れで先手がよろしいのであります併し定跡は何れも先手の宜しき道理に出来て居りますが後手は又後手だけの力で途中で紛らす

のでありますから詳き事は先きに本社で編輯した將棋の書籍を追
 追と研究なさるのがよろしく此書は前にも申せし通り初心者が駒
 組を知るために簡短に能く分るやうに編輯いたしましたのであり
 ますから却て復雜した處は省いて置くので御ざいます

石田指し方 (先手方石田)

石田とは石田と云ふ人の指し始めた爲めに此名がありますが始め
 て此人の指した時は之を崩す工夫がつかずに後手方が苦しんだの
 でありましたらうが其後に種々後手方で受け方を工夫して見まし
 て今では石田は餘り先手の利益な指し方となつて居りません其理
 由は先手でありながら飛車を左へ廻して手損となり後手は却つて
 居飛車で玉を左の方へ圍つて仕舞ひますから畢竟先手と後手が反

對になりまます但し今
 日でも石田を好んで
 指す人がありますが
 多くは力將棋をやら
 うと云ふ人の指すの
 で定跡に明るく稽古
 の積んだ人は之を嫌
 ひます故に此駒組は
 何れを見ても却て後
 手方のよろしきやう
 に思はれます先づ例に依つて駒組の一例を上げます

先手石田の圖

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂	銀	歩	歩	歩	歩	玉	桂
角	歩	桂	銀	歩	歩	歩	玉	桂
歩	歩	飛	歩	歩	歩	歩	玉	桂
歩	歩	飛	歩	歩	歩	歩	玉	桂
香	桂	銀	歩	歩	歩	歩	玉	桂
九	八	七	六	五	四	三	二	一

持駒 双方なし

- 圖七六歩 圖三四歩 圖七五歩 圖六二銀 圖七八飛 圖六四歩

意すべき將棋であります扱其駒組の一例を挙げますれば

先七六歩 先三四歩 先二六歩 先四四歩 先四八銀 先三二銀
 先五六歩 先五四歩 先三六歩 先四二飛 先五八金右 先六二玉
 先六八玉 先七二玉 先七八玉 先五二金左 先一六歩 先一四歩
 先四六歩 先三三角 先二五歩 先九四歩 先九六歩 先八二玉
 先三七桂 先七二銀

右は先手が居飛車で後手が飛車を四筋へ廻つて玉を美濃に圍つた處であります之より先手の仕懸けとなります色々の手もありませんが一通り分れを記しますれば

先五七銀 先六四歩 先五五歩 先同歩 先同角 先六三金
 先八八角 先五四歩 先二四歩 先同歩 先二五歩 先同歩
 先同桂 先二二角 先二三歩 先三一角 先一三桂 先同角

圖二二歩

之で先手が利益となりました併し此外にも双方に色々手がありますからそれ等は他の本社編輯の書籍で研究を願ひます此は單に美濃圍の一例を示したまでであります又此美濃圍は平手では先手は好みませんが左香落ちの將棋では上手方即ち先手方は左に香車がありませんために據ろなく飛車を左へ廻して玉を右

圖の圍濃美方手後

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
皇	将	王	将	王	将	王	将	皇	一
	王	将	王	将	王	将	王		二
	将	王	将	王	将	王	将		三
将								将	四
								歩	五
歩		歩		歩		歩		歩	六
	歩		歩				桂		七
	角	玉		金	銀		飛		八
香	桂	銀	金					香	九

持駒 双方なし

- 同歩 二三角打 三六角打 五五歩 同歩 四五桂
- 同角 同角 同飛 五四角 一二角打 三四歩
- 同銀 二四飛 二三銀 二九飛 四二飛 二一角
- 同角 二三飛

之で却て先手がよろしき形であります因て四間は餘り徳の指しかたでありませんが玉を美濃に圍つて固くなりまますから好んで四間を指す人もあります

中飛車

中飛車は左香落の時に香を落した方で中飛に廻つて敵に左香落の傷を指せぬために中より先手で仕懸ける定跡もありますが平手で餘り大家の指さぬ將棋であります併し素人は最も好んで中飛車を

- を指しますから此に一例を出します
- 七六歩 三四歩 二六歩 四四歩 四八銀 三二銀
 - 五六歩 五四歩 五八金右 五二飛 六八玉 六二玉
 - 七八玉 七二玉 三六歩 六二銀 二五歩 三三角
 - 三七桂 八二玉 七七角 七二金 八八銀 九四歩
 - 九六歩 六四歩 一六歩 一四歩 六八角
- 之で後手方中飛車に組み上げた形であります總體先手は居飛車がよろしいので後手が種々の變た手を指すため四間とか中飛とか飛車を廻るのでありますから此中飛も後手が中飛と指したのであります此でいよ／＼戦端を開くことになりまます即ち後手から中飛を利用して仕懸ける指し方であります(圖省く)
- 五五歩 同歩 同飛 二四歩 同歩 同角

同角 同飛 二三歩打 二六飛 三三角 五七歩打
 五二飛 四六歩 四二飛 四七銀 六三銀 五六歩
 七四歩 六六歩 七三桂 六七金 八四歩 八六歩
 之れにて一戦争終りましたが之から双方の力次第であります之は
 中飛を先手が撃退した分れを示したのであります素人の中は中飛
 を受けるに困ると申す人が多くありますから中飛を撃退した一例
 を示したのであります總體敵の中飛には三六歩を早く突き三七桂
 と上つて居るのがよろしいのであります然すれば敵の中飛の策
 戦は効を失ひますのであります

向飛車

向ひ飛車とは一方は居飛車で一方が角を上つた後へ飛車が廻り丁

度飛車と飛車が向ひ合ふので向ひ飛車と云ふ名があるので御ざい
 ますが之も先手は居飛車が徳でありますから後手が向ひ飛車に廻
 る駒組を示します

七六歩	三四歩	二六歩	四四歩	二五歩	三三角
四八銀	三二銀	五六歩	五四歩	三六歩	四三銀
六八玉	二二飛	七八玉	六二玉	五八金右	七二玉
四六歩	五二金左	五七銀	六二銀	一六歩	一四歩
二六飛	五三銀	九六歩	九四歩	三七桂	七四歩

之れで向ひ飛車の駒組は出来上りましたからいよいよ先手から仕
 懸けて參ります (圖省く)

五五歩	同歩	同角	六四歩	五六銀	六三金
六八銀	八二玉	八八角	七二金	三五歩	同歩

- ④四五歩 ④同步 ④三三角なる ④同柱 ④八八角打 ④五五歩
 - ④同角 ④四四銀右 ④三四歩打 ④五五銀 ④三三歩なる ④五六銀
 - ④同飛 ④五二飛 ④五三歩 ④同飛 ④同飛なる ④同金
 - ④四三と ④同金 ④六一角
- 之れにて先手のよろしき形であります

雁木 (引角)

雁木とは玉を俗に云ふ雁木の形の中に圍ふのであります其駒組は先づ左の通りであります

- ④七六歩 ④三四歩 ④二六歩 ④四四歩 ④四八銀 ④三二銀
- ④五六歩 ④五四歩 ④三六歩 ④四二飛 ④五八金右 ④六二玉
- ④六八玉 ④七二玉 ④七八玉 ④六二銀 ④一六歩 ④一四歩

- ④二五歩 ④三三角 ④六八銀 ④九四歩 ④九六歩 ④八二玉
- ④七七銀 ④七二金 ④七九角 ④四五歩 ④六六歩 ④四三銀
- ④六七金

此末は槽圍ひにも變じます此將棋は先手五五の歩を突きかはられる時は不利益ゆる三筋より急に仕懸けるをよろしとしてあります分れの一例を示しますれば (圖略す)

- ④二二飛 ④三七銀 ④六四歩 ④四六歩 ④同歩 ④同銀
- ④六三銀 ④三五歩 ④同歩 ④同銀

此末はいろいろありまして双方の力によりますから簡短には説きつくされません之は例に依り雁木と云ふ駒組を示したわけであります

三筋

三筋とは飛車を三筋へ廻して指すより名けられたのでありまして
 之も先手は居飛車で後手が三筋へ飛車を廻すのであります但し先
 手で三筋を指ぬとは限りませんが前に申す通り先手は居飛車を法
 としますから之も後手三筋の駒組を出すのであります

七六歩 三四歩 二六歩 四四歩 二五歩 三三角
 四八銀 三二銀 五八金右 四三銀 六八玉 三二飛
 七八玉 三五歩 四六歩 六二玉 一六歩 一四歩
 五六歩 五四歩 九六歩 九四歩 四七銀 七二玉
 六八銀 四二角 四五歩 三四飛

此まで、駒組が出来上りましたからいよいよ之より仕懸けとなら
 ます

四四歩 同銀 二四歩 同歩 二二歩 三三桂

二一歩 二五歩 二二と 二四飛 二三と 同飛
 四四角 二六歩 三八銀引 六四角 三四銀打

之にて先手方のよろしき形であります

香車落

左香落 本定跡

香車を一枚落す時は二段の相違がありますが此香落の傷みを指す
 と云ふ事は餘程上手の人でなくては其ほどの効能が見えませんが
 分指せる力のある黒人でも二段だけの傷みも指すことは困難で平
 手と大した違ひがないやうに指して居ります然すれば素人にあつ
 ては到底此香落ちを下手の徳のやうに指すことは出来ぬと云つて
 もよろしいほどであります夫ゆる素人は香車などは落してもらつ

ても利益が見えぬからと云つて平手より直に角落ちに移る人が多
 いやうであります特に右香車となると其傍に飛車が居るので一層
 傷みを指すことが出来ません之がため近來は右香落は廢つて仕舞
 つて黒人でも少しも指しません故に右香車落ちは省きまして直に
 「左香落」を出しますが前に申す通り左香車は頗る變化が多く之を説
 く時は平手同様に一冊の本が出来るほどでありますから此には例
 に依つて一通りの駒組を出します元來左香落ちは上手の左に香車
 の無いのを付込んで上手の左の端から下手の飛車香車を利用して
 攻め込むのが本定跡でありますが上手は之を避けるために中飛車
 に廻つて早く戦端を開き下手に左の端を指させぬ事などもありま
 すが之は一時の紛らして本定跡は上手も飛車を「七八」へ廻つて防ぐ
 のが正しいのであります先づ駒組は左の通りであります

- ⑩七六歩 ⑩三四歩 ⑩六六歩 ⑩八四歩 ⑩七五歩 ⑩八五歩
- ⑩七七角 ⑩九四歩 ⑩七八飛 ⑩九五歩 ⑩六八銀 ⑩六二銀
- ⑩四八玉 ⑩四二玉 ⑩三八玉 ⑩三二玉 ⑩一六歩 ⑩一四歩
- ⑩二八玉 ⑩五二金右 ⑩三八銀 ⑩九二飛 ⑩九八飛 ⑩九四飛
- ⑩六七銀 ⑩七四歩 ⑩同步 ⑩同飛 ⑩七八飛 ⑩七五歩
- ⑩五八金左 ⑩六四歩 ⑩五六歩 ⑩九六歩 ⑩同步 ⑩同香
- ⑩五五歩 ⑩同角 ⑩九七歩 ⑩同香 ⑩同桂

右の如き形に駒組をするのが普通であります此より後はいよいよ
 戦争となりますので實に手が廣くていづれの手を指して行けば果
 してよろしきやは昔から研究のついた人の無きほどあります故に
 七段などは此研究に苦心して將棋新報へ毎號種々の變化を出しま
 したが尙ほ研究を了らずして長逝しました参考のため其一つを出

しますが之はホンの一斑であります即ち前の「九七」へ桂が香を取つて出た次の手で下手の順であります

九六歩 八五桂 九七歩 八六歩 八七と 七五飛

同飛 同角 七七と 五六銀 七六と 八四角

六六角

以上の分れは五分五分としてありますが實は五分五分では下手が損でありますから必ず香落ちだけの傷みを指すと云ふ譯に行かぬのであります之は其一例を挙げたまでであります

角落

角落にも色々駒組があります歸する處は上手から申しまして玉を銀で圍ふを「銀象嵌」と申しますのと「金象嵌」の時もあります(下手から

申しまして矢櫓圍ひと申します二通りに結着するやうであります其他にもいろいろ早ざしなどもあります此には初心者に角落と云ふものは此如く駒を組むものと云ふことを示す爲めでありますから右二種の本形だけを示します

角落銀象嵌

之は上手が玉を銀二枚で圍ふのが象嵌した如くなりますので銀象嵌と申しまして此場合には下手は玉を右の方へ美濃に圍ひそれより段々金を銀を盛り上げて銀を玉將の頭へ冠せますので銀冠の定跡とも申しまして之を本定跡といたしてあります即ち左の通りであります

四八銀 三四歩 五六歩 五四歩 五七銀 三二銀

- ▲四六歩 ▲四四歩 ▲三六歩 ▲四三銀 ▲五八金左 ▲三二飛
- ▲四七金 ▲六二玉 ▲二六歩 ▲七二玉 ▲二五歩 ▲三三角
- ▲一六歩 ▲一四歩
- ▲三八金 ▲五二金左
- ▲六八玉 ▲九四歩
- ▲九六歩 ▲八二玉
- ▲六六歩 ▲六四歩
- ▲六七玉 ▲七二銀
- ▲七六歩 ▲七四歩
- ▲六八銀よる ▲八四歩
- ▲八六歩 ▲八三銀
- ▲三七金すく ▲七二金

圖の冠銀手下 嵌象銀手上

	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
星				馬			飛		星	一
	王	雫					飛			二
	雫	飛	雫	雫	雫	雫	飛			三
	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛			四
								歩		五
	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	金	歩	六
			桂	玉	銀	金	桂			七
				銀				飛		八
香									香	九

持駒 双方なし

- ▲七七桂 ▲六三金 ▲二六金 ▲五一角引 ▲三七桂 ▲七三桂
- 之れにて上手は玉を銀にて圍ひ銀象嵌となりました下手は又銀を
- 玉の頭へ頂いて銀冠となりました之を角落の本定跡と申します之
- に類したので上手が玉を右へ圍ひますのもありますが大同小異で
- ありますから略します扱例に依て此後の分れを一通り出しませば
- 下手は後手でありませから再び上手より始めまして
- ▲二九飛引 ▲二二飛 ▲八九飛 ▲六二角 ▲八五歩 ▲同桂
- ▲同桂 ▲三三桂 ▲五八玉 ▲二四歩 ▲同歩 ▲同飛
- ▲二五歩 ▲二一飛 ▲七七銀 ▲四五歩 ▲三五歩 ▲同歩
- ▲四五歩 ▲八五歩 ▲同飛 ▲三四桂 ▲二七金 ▲八四歩
- ▲八九飛 ▲二六歩 ▲二八金 ▲四六歩 ▲二八金 ▲三六歩
- 之れにて下手のよろしき形であります此外上手には色々受け手も

あります。が總じて角落以下は下手のよろしきのが定跡であります。て上手は定跡にはまらぬやう何處ぞから紛らして下手を破らんとするのであります。

角落櫓圍

之は下手が玉を櫓に圍ふのでありまして平手の櫓圍ひと似て居ります。が上手は角を抜てありますので先手でも平手の指し方と異ひます。から其駒組を一通り出します。

- ▲四八銀 ▲三四歩 ▲五六歩 ▲五四歩 ▲四六歩 ▲四四歩
- ▲三六歩 ▲三二銀 ▲四七銀 ▲八四歩 ▲六八玉 ▲八五歩
- ▲七八玉 ▲五二金右 ▲一六歩 ▲一四歩 ▲二六歩 ▲三一角
- ▲三八飛 ▲四三金 ▲三五歩 ▲同歩 ▲同飛 ▲三三銀

- ▲四八金 ▲六二銀
- ▲三九飛 ▲三四歩
- ▲五八金 ▲四二玉
- ▲三七金 ▲三二玉
- ▲三六金 ▲七四歩
- ▲八八銀 ▲二二玉
- ▲三七桂 ▲三二金
- ▲六六歩 ▲八六歩
- ▲同歩 ▲同角
- ▲八七歩打 ▲七五角
- ▲六七金 ▲六四歩
- ▲四九飛 ▲七三桂

圖の圍櫓手下落角

九	八	七	六	五	四	三	二	一
▲						▲	▲	▲
	▲	▲			▲	▲	▲	
▲		▲			▲	▲	▲	▲
			▲					
		▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲		▲	▲		
▲	▲							▲
▲	▲							▲

持駒 歩二づ、

- ▲七五歩 ▲八四角 ▲七七銀 ▲六五歩

之にて下手槽圍ひが出来ました形は矢張り下手の利益でありまして之れより分れの戦争となりますが普通に行けば最早下手の勝形であります

飛車落

飛車落の本定跡は下手方が六筋より仕懸け飛車を六二より六一へ引ひて指すのが普通であります因て其駒組を出します

- 飛七六歩 飛三四歩 飛六六歩 飛六四歩 飛七八金 飛六二銀
- 飛六八銀 飛六三銀 飛六七銀 飛五四銀 飛五六歩 飛六二飛
- 飛五八金 飛七四歩 飛四八玉 飛五二金右 飛三八玉 飛四二玉
- 飛四八銀 飛三二銀 飛五七銀 飛二四歩 飛一六歩 飛一四歩
- 飛四六銀 飛二三銀 飛五七金 飛三二玉 飛七七角 飛四二金上

之までが先づ飛車の駒組であります之より分れとなりましていろいろ上手のさし手もありませんが其一例を示しますれば

飛車落駒組

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂					王	角	香
			飛	金	金		銀	
香	桂							香

持駒 双方なし

- 飛九五角 飛六一飛
- 飛五五歩 飛九四歩
- 飛七七角 飛五五銀
- 飛同銀 飛同角
- 飛六五歩 飛三三角
- 飛八三角 飛八八歩
- 飛同角 飛同角
- 飛七七桂 飛八九歩
- 飛同桂 飛七二角打
- 飛六四歩 飛八一飛
- 飛八八と

六八金 八七と 六五桂 七七と 同金 六八銀打
 六六銀 七七銀 同銀 五九角打 六八銀 四八金
 二八玉 六八角 同銀 三九銀 一七玉 二五歩
 二六 二四銀 二五歩 三五銀
 斯やうに指せば下手がよろしくあります、但し之は上手が七七へ角
 を上つた駒組であります又此七七へ桂の上る定跡を桂留と申しま
 して上手は又左の香を「九八香」と一つ上るのがあります之は敵角に
 香を取らせぬ爲め他の駒組にはあまりありませんから一例に出
 します即ち前の駒組と異なる處は上手が七七へ桂を上り九八へ香を
 上り下手は六筋より「六五歩」と仕懸ける定跡であります即ち左の通
 りであります

- 七六歩 三四歩 六六歩 六四歩 七八金 六二銀

六八銀 六三銀 六七銀 五四銀 五五歩 六二飛
 七七桂 七四歩 五八金 五二金右 四八玉 四二玉
 三八玉 三二銀 四八銀 一四歩 一六歩 七三桂
 四六歩 二四歩 三六歩 二三銀 四七金 三二玉
 三七桂 四二金上 二六歩 九四歩 九六歩 八四歩
 四五歩 六一飛 九八香 八五歩 七九角 六五歩
 即ち双方駒組が出来上りましたから下手より六五歩と戦端を仕懸
 けるのであります此後の指し手は上手の受け方にて色々となりま
 すが先づ一通りの例を左に出します何れも飛車落の如き大駒を落
 した將棋は法通りに指せば下手の勝となる譯であります

- 同桂 同桂 四六角 五五桂 同歩 同銀
- 四四桂打 同角 同歩 四六銀 同金 七七桂

- 飛七二角 飛六二飛 飛四五角なる 飛四四步 飛同馬 飛七八成桂
- 飛一一馬 飛六八成桂 飛四三步 飛同金ま 飛四四步 飛四二金引
- 飛四三銀打 飛四一玉 飛四二銀 飛同金 飛四三香打 飛六七成桂
- 飛四二香なる 飛同飛 飛四三金打 飛同飛 飛同歩なる 飛四九銀打
- 飛同玉 飛五八銀 飛三九玉 飛三八金 飛同玉 飛四九角打
- 飛二九玉 飛二八香打までにて下手の勝であります

飛香落

飛車と香車の二枚を落しますのを略して「飛香落」と云ふのであります。最も右の方の香を落されたのでは飛車が傍らに居るので下手方に効能が少ないので左の香車を落すのであります。因て下手は飛車香車を以て敵の左の端より崩して行くのであります。下手が能

- 飛七六歩 飛三四步 飛七八金 飛六二銀 飛六八銀 飛四二玉
- 飛三八金 飛三二玉 飛二二角なる 飛同銀 飛七七銀 飛三三銀
- 飛四八銀 飛五二金右 飛三六歩 飛五四歩 飛三七銀 飛四四歩
- 飛五八玉 飛四三金 飛一六歩 飛九四歩 飛一五歩 飛九五歩
- 飛八八金 飛五三銀 飛四六銀 飛八四歩 飛三五歩 飛同歩

く定跡さへ覚えて居れば上手は容易に勝てません。段で云へば八段の相違であります。但し素人の中には「香落」を指さぬと同様に「飛香落」は餘り指すに飛車落から直に二枚落(飛角)を指しますが此書には順序として「飛香落」も出します。之の駒組も色々ありますが普通に流行る「お酒徳利」と云ふのを指します。之は玉將が中央に居て左右へ「金」をお酒徳利のやうに備へるので其俗名が起つたのであります。扱駒組と申しますと

同銀 八五歩 二六歩 八六歩 同歩 八五歩
 同歩 同飛 七五歩 八七歩 七六銀 八二飛
 八七金 九八角打 七八角打 九六歩 同歩 同香
 八八歩 八七角打 同歩 八八歩 七七桂 七九金打
 之にて下手の勝ち形であります (圖略す)

一枚落 (飛車角落)

二枚落にも色々指し手もありますが先づ二通りが行はれて居ります
 其中「他傳」と云ふのが最も多く指されます他傳と云ふ意味は分
 りませんが定めし或る先生が門弟だけに教へて他傳無用としてあ
 つたものでありませうが今日では一番多く流用されますから先づ
 此駒組みを出します

五六歩 三四歩 五八金右 六四歩 五七金 六五歩
 四六金 七四歩 四八銀 五三銀 四八銀 五三銀
 六八銀 五四歩 四八銀 五三銀 五八玉 六二銀
 五八玉 六二銀 四六歩 六三銀 三四金 三二金
 四七玉 六二玉 四五歩 五五歩 同歩 同飛

他傳駒組の圖

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂	銀	玉	桂	歩	歩	香	香
桂	金	銀						
歩	歩	歩	銀	玉	桂	歩	歩	香
歩	歩	歩	銀	玉	桂	歩	歩	香
歩	歩	歩	銀	玉	桂	歩	歩	香
歩	歩	歩	銀	玉	桂	歩	歩	香
歩	歩	歩	銀	玉	桂	歩	歩	香
歩	歩	歩	銀	玉	桂	歩	歩	香
歩	歩	歩	銀	玉	桂	歩	歩	香

持駒 上手歩 下手歩

先五六歩 後五一飛 先三六歩 後七二玉 先三七桂 後六二金
 先二六歩 後七三桂 先二五歩 後一二香 先一六歩 後八四歩
 先一五歩 後七六歩

以上にて先づ駒組が出来上りました之れより分れの一例を擧げま
 せば左の通りにて絶對の下手勝であります

先四四歩 後同角 先同金 後同歩 先七六歩 後五五歩
 先同歩 後四五歩 先同桂 後五五銀 先五二歩 後同飛
 先五三歩 後四六歩 先同銀 後五六金 先五八玉 後四二飛
 先四七歩 後四六銀 先同歩 後四七銀 先六九玉 後五七歩
 先七七銀行 後五八歩 先七九玉

此より後は下手方は五七と引き次に五八銀ならずと行けはよろ
 しいのであります

先四八銀 後三四歩 先五六歩 後六四歩 先五七銀 後六五歩
 先六八玉 後七四歩 先七八玉 後七五歩 先六八金 後八四歩
 先三八金 後八五歩 先三六歩 後六二銀 先三七金 後六三銀
 先八八銀 後八六歩 先同歩 後同飛 先八七歩 後八四飛
 先一六歩 後一四歩 先九六歩 後五二金右 先九五歩 後三二金
 先二六歩 後四一玉 先四六金 後四二銀 先三七桂 後七三桂
 先二五歩 後七四飛

次に行はれますのは俗に「三步突き切り」と申しまして下手方が右の
 方の三步を突き上げて玉を左へ圍ふのであります前の他傳は玉を
 右へ圍ひましたが今度のは左へ圍ふのでありますから之も出して
 置きます

之れで駒組が出来上りましたが元來二枚の大駒を落してあります

から上手方はモ一指す手もなく負け色であります下手が順當に指せば上手は如何にしても勝てませんが其一例を挙げます

三三五歩 同歩 同金 三三八歩 四八銀 六六歩
同歩 三九歩

之から先きは三九とを同銀と取れば六六角と出て下手の勝ちであります

三枚落

三枚落と云ふ將棋は餘り指しませんので昔から定跡を作つてありませんが關根八段の考案になるものがありますから順序として出して置きます但し三枚落とは飛角の二枚と右の香車を抜くのであります

四八銀 三四歩 五六歩 六四歩 五七銀 六五歩

六八玉 七四歩 七八玉 七五歩 六八金 八四歩

三八金 八五歩 三六歩 八六歩 同歩 同飛

八七歩 八四飛 二六歩 一四歩 二七金 一五歩

二五歩 六二銀 九六歩 六三銀 九五歩 三二金

二六金 五二金 八八銀 四一玉 四六歩 四二銀

三七桂 七三桂 四五歩 七四飛

之れにて例の通り下手方の勝ち形であります上手は指す手がありませんから先づ左の如くでも指しまして終に下手の勝ちであります

五八金 七六歩 同歩 同飛 七七歩 七四飛

四七金 一六歩 同歩 一七歩 一五歩 一八歩

先づ此位より外は上手は指せませんが此二八とが段々右へ寄れば

前の二枚落と同様で下手は何しても勝であります

四枚落

四枚落とは飛角と兩香を落すのであります何れも下手方の勝つき駒組であります左に二三通り出します

其一

- | | | | | | |
|------|------|------|-------|------|------|
| 先四八銀 | 後九四歩 | 先五六歩 | 後九五歩 | 先五七銀 | 後九二飛 |
| 先七八金 | 後九六歩 | 先同歩 | 後同飛 | 先九七歩 | 後九四飛 |
| 先八八金 | 後九三桂 | 先八六歩 | 後八四飛 | 先八七金 | 後一四歩 |
| 先三八金 | 後一五歩 | 先二八金 | 後九八歩打 | 先八八銀 | 後一四飛 |
| 先六六歩 | 後一六歩 | 先同歩 | 後同飛 | 先一七歩 | 後一四飛 |
| 先四六歩 | 後一三桂 | 先二六歩 | 後二四飛 | 先二七金 | 後一八歩 |

(三二一)

落 枚 四

- | | | | | | |
|------|------------------------|------|------|------|------|
| 先三六歩 | 後一九歩 <small>なる</small> | 先三七桂 | 後一八と | 先一六歩 | 後二八と |
| 先同金 | 後二六飛 | 先二七歩 | 後一六飛 | | |

其二

- | | | | | | |
|------|------------------------|------|------------------------|------|-------|
| 先四八銀 | 後九四歩 | 先五六歩 | 後九五歩 | 先五七銀 | 後九二飛 |
| 先八八銀 | 後九六歩 | 先同歩 | 後同飛 | 先九七歩 | 後九四飛 |
| 先三八金 | 後一四歩 | 先六八玉 | 後一五歩 | 先二六歩 | 後一六歩 |
| 先同歩 | 後一八歩 | 先三六歩 | 後一九歩 <small>なる</small> | 先三七桂 | 後一六香 |
| 先二七金 | 後一四飛 | 先三五歩 | 後一七香 <small>なる</small> | 先三六金 | 後二七成香 |
| 先七六歩 | 後二八飛 <small>なる</small> | 先七七玉 | 後三四歩 | 先六六銀 | 後三五歩 |
| 先同金 | 後三七成香 | | | | |

其三

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 先四八金 | 後九四歩 | 先五六歩 | 後九五歩 | 先五七金 | 後九二飛 |
|------|------|------|------|------|------|

先八八銀 後九六歩 同歩 同飛 九七歩 九四飛
 先七八金 後一四歩 五八玉 一五歩 二八銀 九三桂
 先八六歩 後九六歩 八七金 九七歩 同金 一四飛
 先九六歩 後一六歩 同歩 同飛 一七歩 一四飛
 先八七金 後一三桂 二六歩 一八歩

此外いろ／＼ありますが何れも下手方は飛香を利用して敵の兩端より攻め歩を切り棄て、次にと金をつくる考へで指せば下手がいづれもよろしいのであります

五枚落

五枚落は前の四枚落へ更らに桂一枚を落すのであります即ち飛角兩香片桂を落します此桂を落すに左と右がありますから兩方の駒

組を二つ宛出します

左桂落の一

先八八銀 後九四歩 七八金 九五歩 六八玉 九二飛
 先五八金 後九六歩 同歩 同飛 九七歩 九四飛
 先八六歩 後九六歩 八七金 九七歩 同金 二四飛
 先二八銀 後九七香 同銀 三八金打 二六香打 九四飛
 先九六歩 後二四歩で追々香を殺し銀を取り終に下手の勝

左桂落の二

先七八金 後九四歩 八六歩 九五歩 八七金 八四歩
 先八八銀 後七二銀 六八玉 八三銀 七六歩 三四歩
 先七七銀 後七四銀 六六歩 八五歩 六七玉 八六歩
 先同銀 後六四歩 八八歩 六五歩 七七銀 六六歩

- 其の一
- 先四八金 後三四歩 先六八玉 後四四角 先二八銀 後一四歩
 - 先三六歩 後一五歩 先四六歩 後五四歩 先三七金 後一六歩
 - 先同歩 後同香 先二六金 後一二飛 先一五歩 後二六角
 - 先同歩 後一八香なる 先三七銀 後一五飛 先七六歩 後一七飛なる
 - 先四八銀 後二八成香 先五八金 後三八成香 先四七銀 後三七成香
 - 先五六銀 後一八龍 先七八銀 後四八成香 先六九銀 後五八成香
 - 先同銀 後七八金打 先同玉 後五八龍 先六八金 後六九銀
 - 先七七玉 後六八龍
- 其の二
- 先三八金 後三四歩 先七八金 後四四角 先二八銀 後一四歩
 - 先五八玉 後一五歩 先二六歩 後同角 先三六歩 後一六歩
 - 先二七金 後四四角 先一六歩 後二四歩 先二六歩 後二二飛

- 其の三
- 先四六歩 後五四歩 先三七銀 後三三桂 先五六歩 後一七歩
 - 先六八銀 後一八歩なる 先五七銀 後一七と 先同金 後二五歩
 - 先四七玉 後二六歩 先二八歩 後二五桂 先一八金 後一六香
- 其の三
- 始めの總説の中に出しましたが六枚落で上手が下手をハメるさしかたがあります元來は如何に指しても上手は金銀ばかりでありま
すから勝てる道理はないのでありますが上手は上手だけの力があ
りますから下手がハメられる時は負けます左の指し方は下手が角
を早く取られますので下手の力では負けず即ち
- 先三八金 後三四歩 先七八金 後四四角 先二八銀 後一四歩
 - 先六八玉 後一五歩 先二六歩 後同角 先二七金 後四四角
 - 先七六歩

● 大阪屋號發行將棋書類目錄 ●

名人小野五平校閱 將棋新報社編	● 將棋虎之卷 (定跡)	和裝四六判 全一册 定價金六拾錢 送料金四錢
名人關根金次郎共講 八段土居市太郎	● 將棋定跡講義 (定跡)	和裝四六判 全一册 定價金八拾錢 送料金四錢
八段花田長太郎著	● 將棋新定跡 (定跡)	和裝四六判 全一册 定價金壹圓六拾錢 送料金六錢
八段土居市太郎著	● 將棋はめ手千態 (はめ手)	和裝四六判 全一册 定價金壹圓 送料金六錢
大橋、伊藤兩家元 將棋新報社編輯	● 將棋秘傳 (定跡)	和裝四六判 全一册 定價金八拾錢 送料金四錢
天野宗步著	● 將棋精選 (定跡)	和裝四六判 全一册 定價金五拾錢 送料金二拾錢
名人大橋宗英著	● 將棋步式 (定跡)	和裝四六判 全一册 定價金四拾錢 送料金二拾錢
七段福島順喜著	● 將棋絹篩 (定跡)	和裝四六判 全一册 定價金四拾錢 送料金二拾錢
將棋新報社編	● 將棋講義錄 (定跡)	和裝四六判 全三册 定價金壹圓八拾錢 送料金十二錢
名人伊藤看壽著	● 將棋圖巧 (詰將棋百番)	和裝四六判 全一册 定價金四拾錢 送料金四錢
名人關根金次郎校閱 將棋新報社編	● 獨習將棋定跡解 (定跡)	和裝四六判 全一册 定價金五拾錢 送料金四錢

此七六歩と角を化らせるやうにさそひの際を見せるのが上手のハ
メ手でありませす即ち左の通りで角が死にます

● 九九角なる ● 八八銀 ● 九八馬 ● 七九金 ● 八四歩 ● 七八玉

● 八五歩 ● 八九金
之で角を殺されますから上手が七六歩と指した時は角を化すに左
の如く指すのがよろしいのであります

● 七六歩の時 ● 二四歩 ● 三六歩 ● 二五歩 ● 三七銀
● 二二飛 ● 四六歩 ● 五四歩 ● 三五歩 ● 同角

以上にて將棋の駒組は一通り卒業いたしました事と思ひますから之
れより以上の變化さしふりは度々申した通り本社編輯の「定跡講
義」又は「將棋講義錄」等を研究すれば必ず本筋の指し人となります

將棋虎之卷終

終

